

神戸市

# 中山手西遺跡

— 災害対策棟整備事業に伴う発掘調査報告書 —

2005年3月

兵庫県教育委員会

神戸市

# 中山手西遺跡

— 災害対策棟整備事業に伴う発掘調査報告書 —

2005年3月

兵庫県教育委員会



S D O 4 出土 青白磁合子の身

## 例　　言

1. 本書は兵庫県神戸市中央区中山手通5丁目2-15に所在する中山手西遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本遺跡は、調査当時、平成9年4月発行の神戸市埋蔵文化財分布図にもとづき中山手遺跡と呼称していたが、その後の改訂に従い、中山手西遺跡と改称している。
3. 調査は、災害対策棟整備事業に先立ち、兵庫県知事公室防災企画課の依頼を受けて、兵庫県教育委員会が調査主体となって実施した。
4. 調査は、平成9年度に確認調査（遺跡調査番号970202）を行い、翌平成10年度に本発掘調査（遺跡調査番号980092）を実施した。整理作業は、平成16年度に兵庫県知事公室防災企画課からの依頼にもとづいて行った。
5. 現地での写真撮影は、調査担当者が行った。遺物写真撮影はタニグチフォト株式会社に委託して行った。
6. 図示した方位は、第20図を除いてすべて磁北を示し、水準はT. P. 示す。
7. 本書に使用した地図は国土地理院発行の1/25,000地形図「神戸主部」および神戸市発行の1/2,500地形図「諏訪山」「三宮」の一部である。
8. 本書の執筆は藤田が行い、編集は嘱託職員村上京子の協力を得て、藤田が行った。
9. 本書に掲載した遺物・図面は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　魚住分館（明石市魚住町清水字立合池の下630-1）で保管している。また、写真については同事務所（神戸市兵庫区荒田町2-1-5）で保管している。

# 本文目次

## 第1章 調査の経緯

第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査と整理作業の経過	1

## 第2章 中山手西遺跡の位置と歴史的環境

第1節	遺跡の位置	3
第2節	歴史的環境	4

## 第3章 調査の成果

第1節	概要	7
第2節	層序	8
第3節	奈良時代の遺構と遺物	11
第4節	中世の遺構と遺物	13
第5節	近世以降の遺構と遺物	18
第6節	包含層出土の遺物	23

第4章	結語	25
-----	----	----

## 図 版 目 次

- 図版1 遺跡周辺（上空から）  
図版2 遺跡遠景（南から）／同（東から）  
図版3 調査区全景（南から）／同（西から）  
図版4 調査区全景（上空から）  
図版5 北区 全景（西から）／北区 東微高地（南から）  
図版6 南区 全景（北から）／南区 S E 0 1と畝状遺構（北から）  
図版7 北区 西壁（東から）／北区 西壁（南東から）／北区 東微高地側の北壁（南から）／南区  
西壁（北東から）／南区 南壁（間知石積み水路断面を北から）  
図版8 ピット断面／ピット断面／S K 0 1断面（南から）／S K 0 2断面（南から）／S K 0 3断面  
(北から)／S D 0 3断面（南から）  
図版9 伏せ鉢遺構（北から）／同（北横から）／同（東から）／同下部（北から）  
図版10 S D 0 6（南西から）／同断面（西から）  
図版11 出土土器1  
図版12 出土土器2  
図版13 出土土器3  
図版14 出土土器4  
図版15 出土金属器・石器

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置	1
第2図 調査区位置図	2
第3図 神戸市域の地質図	3
第4図 周辺の遺跡	5
第5図 遺構配置図	7
第6図 土層断面図	9・10
第7図 S D 0 1出土遺物	12
第8図 S K 0 1～0 3、S D 0 3	14
第9図 S K 0 2・0 3、S D 0 3・S D 0 4出土遺物	15
第10図 S D 0 2出土遺物	16
第11図 S D 0 4～0 6	17
第12図 S E 0 1、畝状遺構	19

第13図 S E 0 1	20
第14図 伏せ鉢遺構	21
第15図 S E 0 1、S D 0 6、伏せ鉢遺構出土遺物	22
第16図 包含層出土の土器・土製品	23
第17図 包含層出土の石器 1	24
第18図 包含層出土の石器 2	24
第19図 包含層出土の金属器	24
第20図 明治～戦後の中山手西遺跡周辺の変遷	26

## 表 目 次

第1表 周辺の遺跡一覧	5
-------------	---

## 写 真 目 次

写真 1 間知石積み水路断面（調査区南壁）	8
写真 2 S D 0 1 遺物出土状況（北から）	12
写真 3 S D 0 6 石垣検出作業（南西から）	18
写真 4 S D 0 6 石垣裏込め断面（東から）	18
写真 5 伏せ鉢遺構調査状況	21

# 第1章 調査の経緯

## 第1節 調査に至る経緯

平成7年1月17日午前5時46分に阪神・淡路地域を襲った大地震は、6,400人以上の死者、24,800棟を越える家屋被害を始め、大規模火災の発生、交通機関の途絶、ライフラインの寸断など、未曾有の大惨事を引き起こした。

この阪神・淡路大震災を教訓として、各地で防災拠点が整備されてゆく中で、災害発生時の危機管理とその対策にあたるための拠点的な施設の重要性と必要性が認識されるところとなった。そこで、全国に先駆けて、いかなる災害に対しても堅牢で、災害対策本部機能を発揮できる専門庁舎である「災害対策棟」の整備が計画された。その位置としては、中央区中山手通5丁目の元知事公舎跡地で、当時は更地となって県庁来庁者用の駐車場などになっている場所が選ばれた。そこは、ちょうど県庁の北側にあたり、周辺には県警本部などの県関係施設が集中し、災害発生時には災害対策活動の要となる地域に位置する。

当時、周辺の埋蔵文化財包蔵地としては、建設予定地の北東、中山手通4丁目に中世の中山手遺跡が周知されていたが、それ以外は、周辺の市街地化が進んでいることから、十分な情報が無かった。そこで、兵庫県知事公室防災企画課からの依頼にもとづき、平成9年6月に事前の確認調査を実施した。

その結果、事業地の北半において中世を中心とする遺跡の存在が明らかとなり、平成10年6月～8月に本発掘調査を実施した。

遺跡の名称については、調査当初、既知の「中山手遺跡」が西方へ広がっているものとして、「中山手遺跡」としていた。しかし、神戸市教育委員会発行の『神戸市埋蔵文化財分布図』の改訂に倣い「中山手西遺跡」と改称した。

## 第2節 調査と整理作業の経過

### 1. 確認調査

調査担当者：復興調査第2班（主査）平田博幸

調査面積：30 m<sup>2</sup>

調査期間：平成9年6月7日

事業予定地周辺は北から南に下がる緩斜面であり、さらに西から東へも緩やかに下がる。事業地は3段の雑壇状に造成されており、中でも北に位置する上段と中段との段差は大きく、高さ2m以上の石垣が組まれている。



第1図 遺跡の位置

調査は $2 \times 3$ mのグリッドを上段に3ヶ所（1～3グリッド）、中段と下段に各1ヶ所（4・5グリッド）、計5ヶ所のグリッドを設けて行った。各グリッドとも遺物包含層までの盛土と整地層は重機を用いて掘削し、遺物包含層以下は人力によって掘削し遺構面の調査を行った。

上段の1グリッドと3グリッドでは地表下1.8～1.9mに中世の遺物包含層があり、その直下で、ピットや溝状の遺構を確認した。南側の2グリッドでは遺物、遺構ともまったく確認されなかった。中・下段の4・5グリッドでは表土直下から従前の建物を解体した際の整地層が続き、それぞれ地表下2.05m、1.3mでコンクリート土間となり、それ以下の掘削を行うことはできなかった。

この結果にもとづき、上段の北側を中心に本発掘調査を実施することとなった。

## 2. 本発掘調査

調査担当者：復興調査班（主査）平田博幸・（主査）藤田 淳

調査面積： $475\text{ m}^2$

調査期間：平成10年6月1日～8月6日

本発掘調査の対象地は3段にわたる事業地のうち最上段部分の全域であるが、隣接地との境界の安全を確保する必要とグリッド2の調査結果から、北側を中心とする $475\text{ m}^2$ について調査を行うこととした。

掘削残土については、埋め戻しを行う必要から、調査区南側の中段部分に仮置きすることとしていたが、掘削土が多く、すべてを置ききることができなくなった。さらに、防災企画課より、井戸の掘削工事のため、北側部分の早期引き渡しの要望があったため、調査区を北区と南区に分割することとした。

両区とも、確認調査の結果にもとづき、遺物包含層までの約2mは安全勾配をつけながら機械掘削し、その後は人力で精査と遺構の掘削を行った。

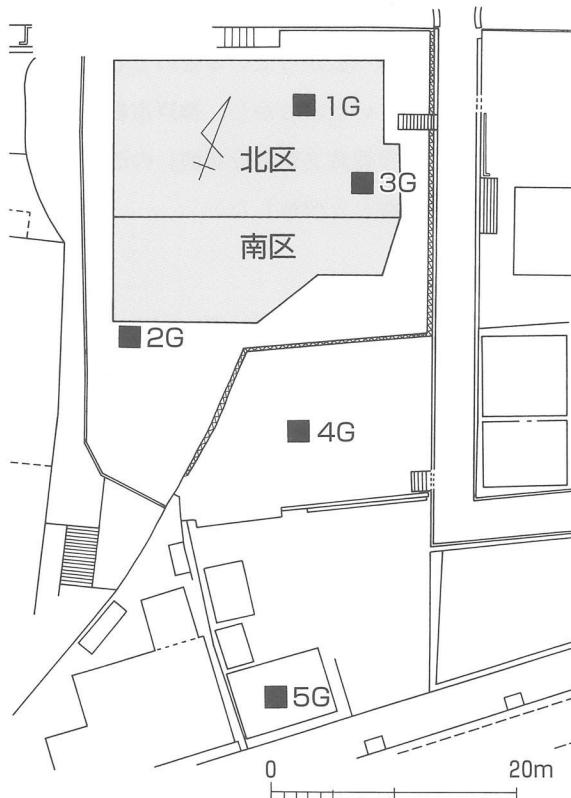
北区は調査が終了し、埋め戻しが完了した時点で事業者と管理引継を行い、南区の調査へと移った。南区の調査終了後、中段に仮置きした残土の埋め戻しを行って、すべての調査を終了した。

北区については、遺構掘削終了後、小型ヘリコプターによる空中写真撮影を行い、遺構の垂直全景写真を撮るとともに、周辺の地形との関連性を得た。

## 3. 整理作業

整理作業は平成14年4月から開始した。

土器を中心に、接合・補強、実測、復元、写真撮影、遺構図補正、トレース、レイアウトまでの諸作業は8月中にはほぼ完了し、年度内に本報告書を刊行した。また、金属器の保存処理も本年度中に実施した。



第2図 調査区位置図

## 第2章 中山手西遺跡の位置と歴史的環境

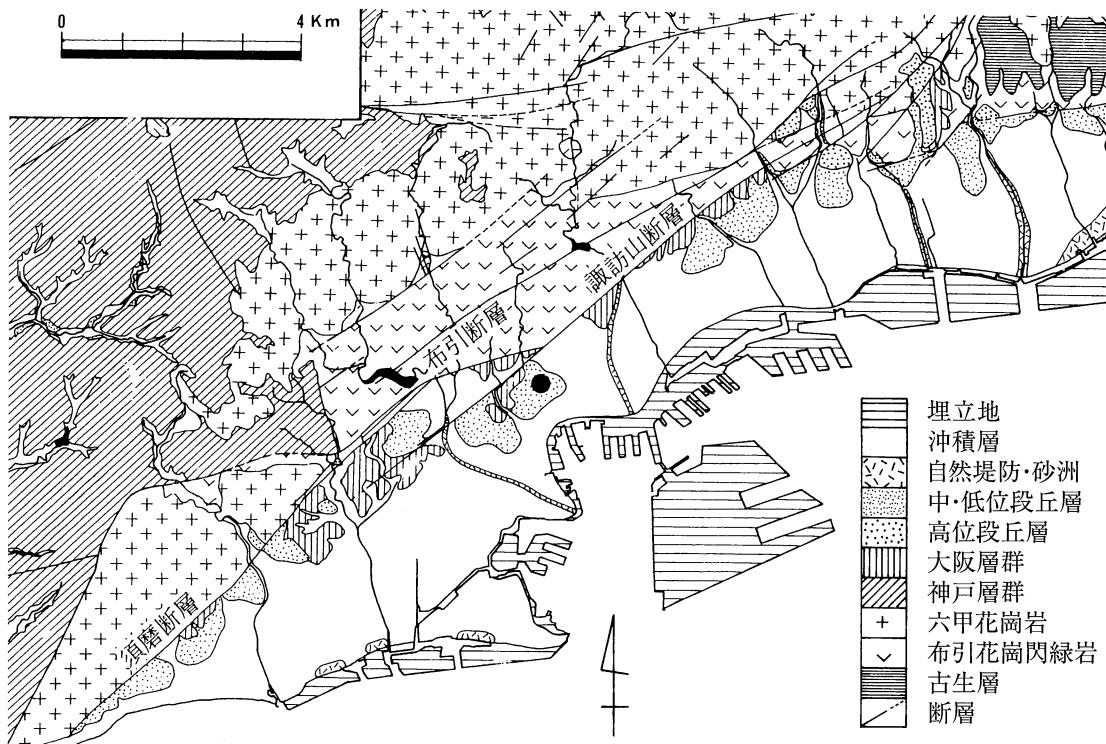
### 第1節 遺跡の位置

中山手西遺跡は、六甲山地の南麓、神戸市中央区中山手通5丁目に所在する。

六甲山地はその東北部に位置する六甲山（標高931m）を主峰とし、南西方向に向かって摩耶山（標高698m）、再度山（標高469m）、高取山（標高328m）と次第に標高を下げ、西端の鉢伏山では200mほどの高さとなる。南麓には流出した土砂によって形成された平野部が広がっており、その境には阪神・淡路大震災をもたらした活断層が走り、震源となった淡路島の野島断層へと続いている。平野部では、生田川と石屋川の流域で扇状地が良く発達し、これより西の湊川・妙法寺川流域では扇状地の発達が悪いため、標高が低く平坦な土地が広がっている。断層を境に、平野側には段丘化した扇状地が舌状に分布しており、中山手西遺跡もそうした段丘の一つに立地している。

中山手西遺跡は、河川の流域で言えばちょうど生田川と湊川の中間に位置する。遺跡の少し背後には諏訪山があり、扇状地の堆積物を供給したであろう再度谷川などの小河川が小さな谷を刻んでいるが、いくつかは市街地に入るとその姿を隠している。遺跡は段丘の中程で、東端に寄った所に立地しており、南に約300m下ると段丘崖に至り、急に標高を下げる。

西に目を向ければ、兵庫区平野町～荒田町にかけて別の段丘が存在する。二つの段丘は宇治川によつて開析された、比較的深い谷で分断されている。また、東へは徐々に高度を下げつつ、生田川まで平坦な地形が続いている。



第3図 神戸市域の地質図（神戸市教育委員会 1989年『戎町遺跡第1次発掘調査概報』第56図を一部改変）

## 第2節 歴史的環境

### 縄文時代

中山手西遺跡のある神戸市中央区では、旧石器時代の遺跡は知られていない。縄文時代では、早期の段階から遺構を伴う遺跡が散見される。三宮駅の東側に広がる雲井遺跡では大川式・神宮寺式に伴う集石遺構や土坑が発見されており、熊内遺跡の竪穴住居跡も早期初頭に遡る。宇治川南遺跡では早期～弥生時代前期前半までの土器が流路内から出土し、祇園遺跡でも早期～前期の土器が出土している。前期～中期は数少ないが、後晩期になると楠・荒田町遺跡で後期の土坑が発見され、大開遺跡や旧三ノ宮駅構内遺跡、熊内遺跡などで土器の出土が見られるなど、弥生時代への胎動が感じられるようになる。

### 弥生時代

弥生時代になると生田川、湊川それぞれの流域で中核的な集落が成立する。生田川流域では、居住域は未確認ながら前期～中期の周溝墓群が広範囲で発見されている雲井遺跡があり、後期中頃には二重環濠をもつ熊内遺跡が成立する。湊川流域では、大開遺跡で竪穴住居跡、貯蔵穴、木棺墓などを含む前期古段階の環濠集落が発見されている。楠木・荒田町遺跡では前期～後期の竪穴住居跡があり、前期では多数の貯蔵穴が、中期には方形周溝墓群が伴う。掘立柱建物9棟もこれらとは離れた地点で発見されている。また、祇園遺跡で発見された後期～古墳時代前期の竪穴住居跡は、熊内遺跡のような環濠で区画されている可能性が指摘されている。祇園遺跡と同時期の集落は兵庫松本遺跡にも見られ、竪穴住居跡や掘立柱建物、土坑が発見されている。

これらの低地に立地する集落に対して、六甲山から延びる丘陵上には布引丸山遺跡、祇園神社裏山遺跡、天王山遺跡などのいわゆる「高地性集落」が立地している。昭和初年に小林行雄が発見した布引丸山遺跡は標高140mの独立丘陵上にあり、凹線文を多用した中期後半の土器が発見されている。

### 古墳時代

前期古墳では標高約110mの丘陵先端に立地する夢野丸山古墳がよく知られており、竪穴式石室から重列式神獣鏡や銅鏡、鐵鏡、直刀、剣が出土している。湊川、生田川流域では今のところ中期古墳は知られていないが、横穴式石室を主体部とする後期の古墳では、唯一、中宮黄金塚古墳が善照寺の敷地内に現存している。すでに消滅した古墳では中宮古墳が大正年間に発掘され、石室内から多数の副葬品が出土したと伝えられている。また、生田川沿いには生田町古墳群が存在した。

古墳時代の集落遺跡は、弥生時代に比べ調査例も少なく、長田区の旧刈藻川流域に見られるような盛行化は今のところ確認できない。熊内遺跡では弥生時代後期の環濠集落に続いて前期の竪穴住居跡、後期の木棺墓・土坑墓が発見されている。中期末～後期の遺跡としては、生田遺跡で多数の竪穴住居跡と有力豪族の倉庫群と推定されている掘立柱建物が発見されており、消滅した生田古墳群との関連性が想定される。また、下山手遺跡の掘立柱建物は、弥生時代後期～古墳時代後期で時期を限定しえない。

### 古代

飛鳥時代では、二宮遺跡で竪穴住居跡、掘立柱建物、鍛冶関連遺構が発見されている。奈良時代では、旧三ノ宮駅構内遺跡で掘立柱建物や内部に木組み構造物をもつ土坑が発見され、須恵器の稜碗も出土している。また、奈良時代後半の遺物が多量に出土した土坑もある。奈良時代の土器がまとまって出土した土坑は楠・荒田町遺跡でも発見されている。旧三ノ宮駅構内遺跡は、元町通り商店街通りに推定されている古代山陽道との関係が考えられる遺跡である。



第4図 周辺の遺跡 (●は古墳)

第1表 周辺の遺跡一覧

No	遺跡名	No	遺跡名	No	遺跡名	No	遺跡名
1	滝山城	11	古墳	21	下山手	31	夢野丸山古墳
2	布引丸山	12	花隈城向城跡	22	元町	32	菊水町
3	熊内	13	生田	23	東川崎町	33	楠・荒田町
4	生田町古墳群	14	中山手	24	下山手北	34	福原
5	二宮東	15	花隈城跡	25	宇治川南	35	東山
6	二宮	16	旧三ノ宮駅構内	26	祇園神社裏山	36	兵庫松本
7	雲井	17	中山手西	27	天王谷	37	湊川
8	磯上	18	中宮古墳(消滅)	28	祇園	38	大開
9	三本松古墳	19	中宮黄金塚古墳	29	古墳	39	塚本
10	古墳	20	北長狭御所	30	雪御所	40	兵庫津

その後、平安時代中頃までの遺跡はあまり知られていないが、平安時代も終わりに近づくと、この地域が俄に日本の政治の中心として歴史の表舞台に登場することとなる。即ち、平清盛による日宋貿易の拠点としての「大輪田泊」の改修、平家一門の別邸の建設、そして、源平の争乱の中で強行された治承四年（1180）の福原遷都である。ただ、こうした歴史的事実が記録されているにもかかわらず、これを裏付ける考古学的な知見はほとんど得られていなかった。

それが、近年の発掘調査で、ようやく平家一門の足跡をたどることができるようになってきた。楠・荒田町遺跡の神戸大学附属病院内の調査では、大型掘立柱建物と二重堀が、その北に位置する祇園遺跡では園池を伴う庭園跡が発見され、ともに平氏一門に関連する邸宅などの遺構と考えられている。しかし、平清盛が改修した大輪田泊や福原京の位置については、いまだ確定するに至っていない。

## 中世

平氏滅亡によって改修が中断した大輪田泊は、鎌倉時代の僧、重源によって再び改修される。周辺には町屋が形成され、港湾都市「兵庫津」として発達してゆく。この町屋については、震災後の発掘調査によってようやく範囲や地割り、建造物などの実体が明らかになりつつある。

兵庫津をとりまく鎌倉～室町時代の集落は、二宮遺跡、元町遺跡、旧三ノ宮駅構内遺跡、楠・荒田町遺跡、大開遺跡などで掘立柱建物、井戸、堀などの遺構が発見されている。しかし、調査範囲も狭く断片的な情報しか得られない。

また、この地域は南北朝期や応仁の乱では再三、戦火の舞台ともなった。新神戸駅背後の城山に築かれた滝山城は、天正7年（1579）に信長により落城されるまで、赤松氏、松永秀久などを城主とし、いくたびかの戦火にまみれた。戦国期末に荒木村重が築城した花隈城跡は、村重の謀反により短期間で廃城とされた。

## 参考文献

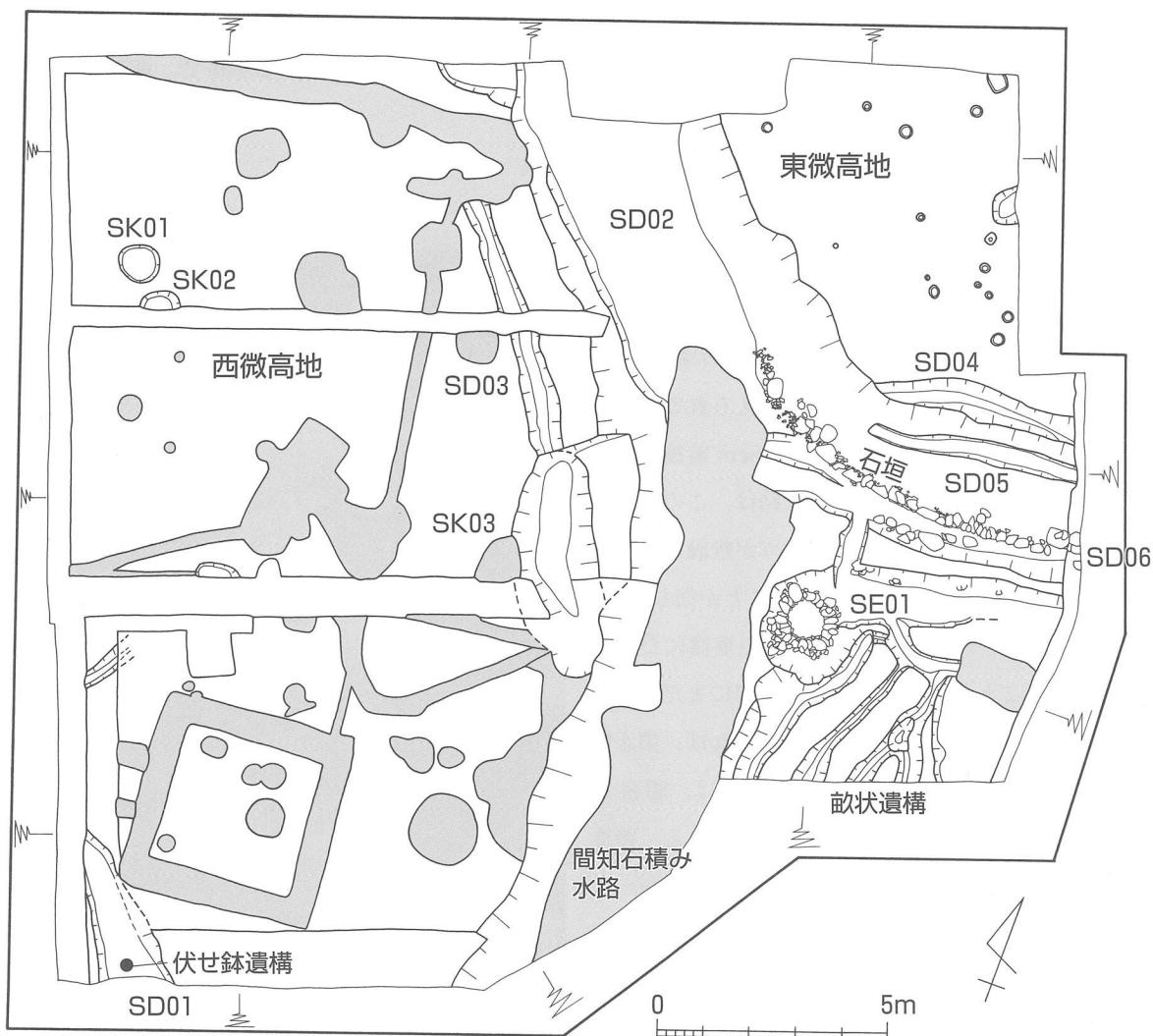
- 梅原末治 1925年 「神戸市夢野丸山古墳」「兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告」第二輯  
小林行雄 1935年 「神戸市布引丸山の弥生式土器」「考古学」6卷3号  
神戸市教育委員会 1986年 「昭和58年度神戸市埋蔵文化財年報」  
神戸市教育委員会 1990年 「昭和62年度神戸市埋蔵文化財年報」  
神戸市教育委員会 1994年 「昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報」  
神戸市教育委員会 1993年 「平成2年度神戸市埋蔵文化財年報」  
神戸市教育委員会 1994年 「平成3年度神戸市埋蔵文化財年報」  
神戸市教育委員会 1995年 「平成4年度神戸市埋蔵文化財年報」  
神戸市教育委員会 1996年 「平成5年度神戸市埋蔵文化財年報」  
神戸市教育委員会 1997年 「平成6年度神戸市埋蔵文化財年報」  
神戸市教育委員会 1998年 「平成7年度神戸市埋蔵文化財年報」  
神戸市教育委員会 2000年 「平成9年度神戸市埋蔵文化財年報」  
神戸市教育委員会 2001年 「平成10年度神戸市埋蔵文化財年報」  
神戸市教育委員会 2002年 「平成11年度神戸市埋蔵文化財年報」  
神戸市教育委員会 2003年 「平成12年度神戸市埋蔵文化財年報」  
神戸市教育委員会 1980年 「楠・荒田町遺跡発掘調査報告書」  
神戸市教育委員会 1991年 「雲井遺跡 第1次発掘調査報告書」  
神戸市教育委員会 1993年 「大開遺跡発掘調査報告書」  
神戸市教育委員会 1998年 「雲井遺跡（第8次調査）」  
神戸市教育委員会 2000年 「祇園遺跡 第5次発掘調査報告書」  
神戸市教育委員会 2003年 「熊内遺跡 第3次調査発掘調査報告書」  
大開遺跡調査団 1998年 「大開遺跡発掘調査報告書」  
淡神文化財協会 1991年 「元町遺跡発掘調査概報」  
兵庫県教育委員会 1982年 「兵庫県の中世城館・莊園遺跡」  
兵庫県教育委員会 1998年 「楠・荒田町遺跡」  
兵庫県教育委員会 2004年 「兵庫津遺跡（浜崎・七宮地区の調査）」  
兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2000年 「平成11年度 年報」  
兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2007年 「平成15年度 年報」

## 第3章 調査の成果

### 第1節 概要

中山手西遺跡では、遺構・遺物とも全般に希薄であったが、主に平安時代末～鎌倉時代前半と奈良時代の遺構の広がりが明らかとなった。当時の遺構面は、明治以降の大規模な盛土によって2m近く埋め立てられ、現在は平坦化されているが、鎌倉時代以前には中央を南北に走る自然流路（SD02）を境に、東側には地盤の安定した微高地（東微高地）が形成されている。西側も最終的には微高地状の平坦地となっているものの（西微高地）、東微高地に比べて10cmばかり低く、かつては河川の影響を受けやすい谷状地形、あるいは旧河道だったものが、埋没して平坦化したものであることが判明した。中央の自然流路は西微高地の形成後も残り、終戦後には一時的に間知石を積んでレンガを敷いた水路が構築された。また、東微高地の南側は、段差をもって1mほど低くなっている。

東微高地上には散漫ながら柱穴と溝（SD03・04）が発見されており、中世集落の南西端を捉えたと考えている。



第5図 遺構配置図（アミ部は搅乱）

西微高地上では土坑状（S K 0 1～0 3）あるいは溝状の遺構（S D 0 5）が発見されたが、居住を示すような遺構は認められなかった。その下層には土壤化したシルト層が分布しており、土層の断面観察により水田の存在を推定した。微高地の南西隅では、奈良時代の小さな自然流路（S D 0 1）も発見されている。出土した土器には、細片化やローリングが認められないことから、近在に奈良時代の遺跡が存在すると考えられる。

また、東微高地南側の一段下がったところでは、近世の井戸（S E 0 1）と畝状遺構、石垣を伴う水路（S D 0 6）が発見された。これらは江戸時代中頃以降、市街地化が始まる明治中頃まで、周辺一帯に農地が広がっていた状況を示している。

## 第2節 層序

調査区は深度が2m以上あり、調査区中央の水路を挟んで土層の堆積状況は異なっている。細かく見れば多くの堆積層に細分できるものの、基本的にはI層～VI層の6つに大別してとらえることが可能である。I層とII層は、市街地化に伴う大規模な整地土層であるが、東西で堆積状況が異なるため区別した。その下のIII層は市街地化前に広がっていた耕地の土壤層である。明治14年に作成された日本都市地図（第20図左）を見ると、下山手通りの北側一帯には水田が広がっており、市街地化が進むのは明治中頃以降のことであろう。V層とVI層は、それぞれ西と東の微高地を形成する土層で、東微高地にはIII層とVI層の間に遺物包含層（IV層）が認められる。

次に、もう少し詳しく各層の堆積状況を見てみよう。

### I層（I a層～I o層）・II層（II a層～II i層）

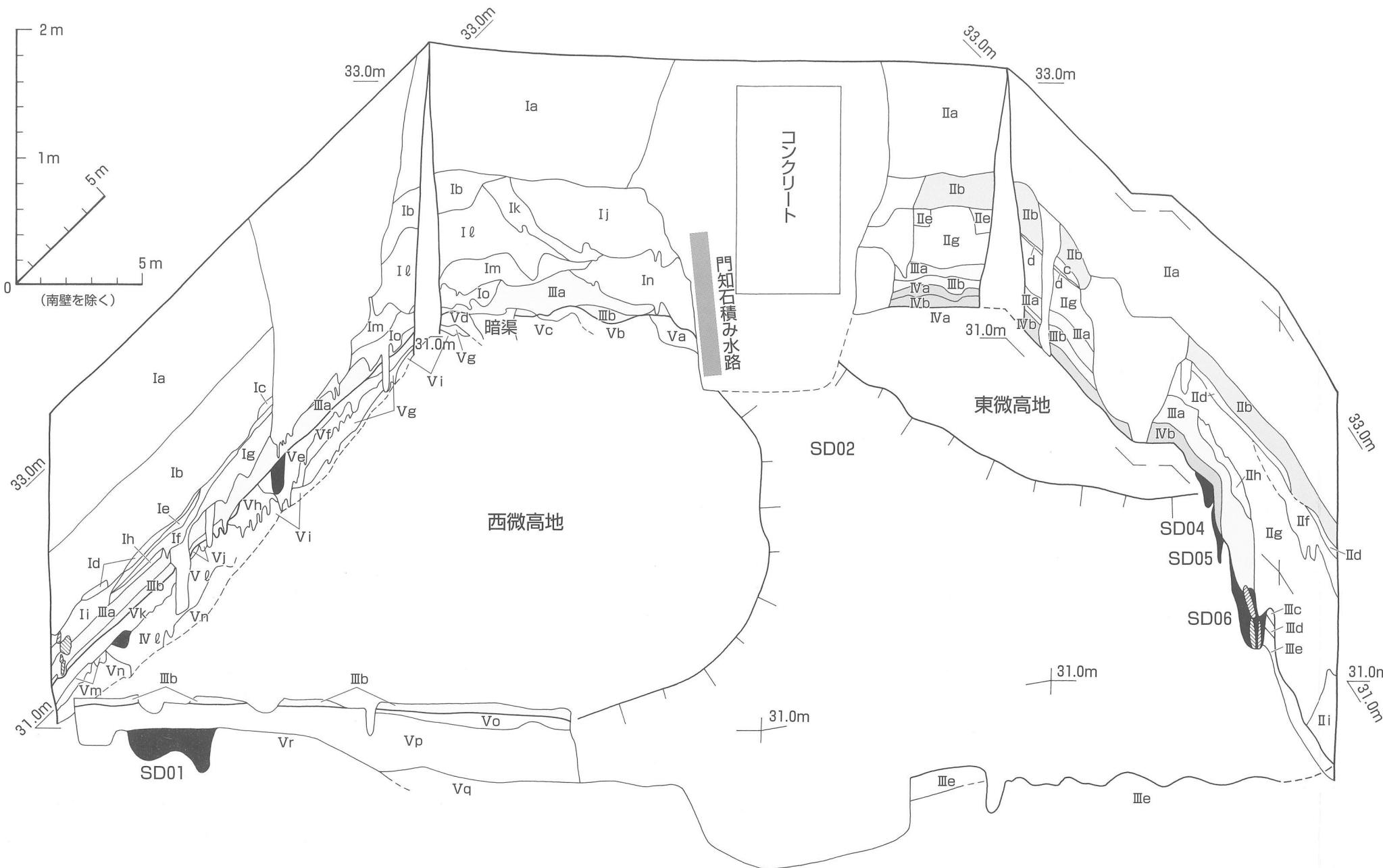
明治中頃以降の埋め立てに伴う整地土や攪乱層で、2m前後の厚さがある。標高32m付近で全体がほぼ水平に均されており、水路の東側では、第2次世界大戦の空襲によると考えられる焼土や炭を多量に含む層（II b層）が15cm前後の厚さで広がっている。中央を走る水路は、この焼土を切って石組みが構築され、レンガが敷設されており、戦後に設けられたものであることが知れる（写真1）。焼土を伴う整地層が水路の東側にだけ認められることから、戦前には、西側にまだ耕地が残されていたのかもしれない。とすれば、洪水性堆積物と考えられるI d層～I h層は、昭和13年の阪神大水害時に流入した可能性がある。西微高地側を東微高地側と同じ高さにしたI j層～I o層およびI b層は、戦後の水路築造に伴う大規模な埋め立てを示すものであろう。

### III層（III a層～II e層）

市街地化前の旧耕作土（III a層）とその床土層



写真1 間知石積み水路断面（調査区南壁）



【西微高地側】

Ia	整地層 白色シルトなど
Ib	整地層 真砂土など
Ic	整地層 炭混じり土
Id	5Y5/2 灰オリーブ シルト質細砂(粗砂含む)
Ie	2.5Y7/8 黄 シルト混じり粗砂～中礫
If	5Y5/2 灰オリーブ シルト混じり粗砂～細砂
Ig	洪水砂層 10YR5/3 にぶい黄褐 中砂～細砂
Ih	2.5Y5/2 暗灰黄 シルト質粗砂～中砂
Ii	整地層 10YR5/6 黄褐 シルト質中砂～粗砂
Ij	整地層 真砂土
Ik	整地層 下部に煉瓦を含む
Im	整地層 炭と煉瓦を含む
In	整地層 2.5Y6/2 灰黄 シルト質中砂～細砂
Io	整地層 2.5Y6/3 にぶい黄 シルト質中砂～細砂(炭・白色ブロック混じる)
IIIa	旧耕土層 2.5Y5/1 黄灰 シルト質中砂～細礫
IIIb	旧耕土層 7.5YR5/8 明褐 シルト質中砂～細礫(Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )

Va	5Y6/3 オリーブ黄 シルト混じり粗砂～細礫
Vb	2.5Y6/3 にぶい黄 細砂～細礫(Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )
Vc	2.5Y5/2 暗灰黄 細砂～細礫
Vd	10YR5/1 褐灰 シルト質中砂～細砂(締まり良い、上面にFe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )
Ve	5Y5/1 灰 シルト混じり細砂(粗砂・中砂混じり、上面にFe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> 、北へ細砂に変化)
Vf	7.5YR3/1 黒褐 シルト混じり粗砂
Vg	7.5YR6/1 褐灰 細砂と極粗砂のラミナ
Vh	2.5Y5/1 黄灰 シルト質細砂～細礫(上面にFe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )
Vi	5YR1.7/1 黒 シルト(上面に足跡状の窪み)
Vj	10YR4/1 褐灰 シルト質中砂～細礫
Vk	5Y5/2 灰オリーブ シルト混じり細砂～細礫(下部ほど粒径大)
Vl	2.5Y3/1 黒褐 シルト質細砂～粗砂
Vm	10YR4/2 灰黃褐 シルト質細砂～中礫
Vn	10YR4/1 褐灰 シルト混じり粗砂～中礫
Vo	2.5Y5/2 淡灰黄 シルト混じり粗砂～細礫
Vp	2.5Y5/2 淡灰黄 シルト混じり粗砂～細礫(5oよりやや暗い)
Vq	2.5Y5/1 黄灰 シルト質細砂(中世の土器を含む)
Vr	10YR5/2 灰黄 シルト質中砂～粗砂(細礫混じり)

【東微高地側】

IIa	整地層 焼土・炭
IIb	整地層 2.5Y4/3 オリーブ褐 シルト混じり粗砂～中砂
IIc	整地層 2.5Y8/6 黄 砂礫(真砂土)
IId	整地層 10YR4/4 褐 シルト混じり粗砂～極粗砂
IIe	整地層 10YR5/3 にぶい黄褐 中砂～中礫(若干シルト質)
IIg	整地層 2.5Y5/3 黄褐 細砂～細礫(3a・3b・4a・4b層がブロック状に混じる)
IIh	5Y6/3 オリーブ シルト混じり中砂～粗砂(細礫含む)
IIi	2.5Y6/2 灰黄 シルト混じり中砂～細礫(褐色土のブロック含む)
IIla	旧耕土層 2.5Y5/1 黄灰 シルト質中砂～細礫
IIlb	旧床土層 7.5YR5/8 明褐 シルト質中砂～細礫(Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )
IIlc	土手盛土層 5Y6/2 灰オリーブ シルト混じり粗砂・中砂
IIld	土手盛土層 2.5Y5/3 暗灰黄 中砂細砂質シルト(上面に砂礫を薄く帯状に挟む)
IIle	旧耕土層 5Y5/2 灰オリーブ シルト混じり粗砂～中砂
IVa	遺物包含層 2.5Y5/3 黄褐 シルト質中砂～細砂(粗砂～細礫混じり)
IVb	遺物包含層 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト質中砂～細砂(粗砂～細礫混じり)
Vla	7.5YR4/1 褐灰 シルト混じり粗砂～中砂 (上面が遺構面)

第6図 土層断面図

(Ⅲ b層) を主とし、層厚は約 20 cmである。旧耕作土上面の標高は東微高地側で約 31.5 m、西微高地側で 31.4 m前後であるが、一段低い南東隅では約 30.2 mとなる。

#### IV層 (IV a層・IV b層)

暗灰黄色あるいは黄褐色の遺物包含層で 15 cm前後の層厚がある。東微高地上にのみ広がり、西微高地側や南東隅の一段下がった部分には形成されていない。中世を主とする遺物を含むが、量は少なく、細片化している。

#### V層 (V a層～V r層)

西微高地を構成する層であり、上面が中世の遺構面となる。土坑や溝状の遺構を検出しているが、遺構密度は極めて低く、攪乱と区別しがたいものがある。V層は、シルト混じり、あるいはシルト質の砂層や砂礫層、シルト層などで構成され、全般に締まりが弱い。北壁の断面をみると自然流路に向かって右下がりの傾斜をもって堆積していることがうかがえ、西壁では中央が窪み流路状に堆積している状況も認められる (V a層～V d層、V i層)。したがって、V層は旧河道内あるいは谷状地形の中の堆積物とみなすことができる。その最終段階の流れが調査区中央に残された自然流路 (S D 0 2) なのである。この自然流路沿いには、中世の遺物を多く含む暗褐色のシルト質土層が認められるところがあり、一部は遺構として報告している (S K 0 3)。

西壁北半に見られる黒色シルト層 (V i層) の上面には深さ 10 cmほどの小さな窪みが連続するところがあり、足跡による窪みである可能性がある。V i層は土壤化していると判断され、水田の存在を示すものと考えられる。奈良時代の土器が出土した S D 0 1 はこの層よりも上位にあり、水田とすれば奈良時代以前に位置づけられる。しかし、平面的に 20～30 m<sup>2</sup>の狭い広がりをみせるに過ぎないことや、畦畔と考えられる隆起が確認できなかったため、断面での観察にとどめた。

#### VI層

東微高地の最上部に堆積した層である。褐灰色のシルト混じり砂層で、固く締まっており安定した地盤が形成されている。上面の標高は約 31.2 mで、北から南に向かってわずかに下がるもののはほぼ平坦である。中世の遺構面となっており、柱穴や溝はこの層の上面から掘り込まれているが、層中からは遺物は出土していない。

以上から、遺跡の微地形を復元すると、遺跡は段丘化した扇状地上に立地するものの、その中にも微起伏があったことがわかる。低いところは河道あるいは小規模な流路が刻まれ、高いところは中州状の高まりとなって残されていたのであろう。調査区西半はやや低い部分であったため、洪水等によりしばしば上流から土砂が運ばれ、次第に微高地状を呈するようになっていったが、居住地なることはなかつたようである。北東部は微高地として安定していたため、中世には居住域として利用された。

### 第3節 奈良時代の遺構と遺物

#### 1. 遺構

奈良時代の遺構としては、流路 1 条 (S D 0 1) のみである。遺構の状況から自然流路と考えている。

##### S D 0 1

V k 層 (層厚約 10 cm) の直下で発見され、調査区の南西隅を斜めに走向する。大部分は調査区の周

周に巡らせた側溝の中に収まり、調査し得た延長は2.4m、幅40~80cm、深さ約10cmである。上流側から下流側に向かって開き、深さも浅いことから、自然流路であると考えられる。埋土は灰オリーブ色の細砂~細礫で、奈良時代中頃の須恵器や土師器がまとまって出土した。須恵器の蓋や土師器の杯には残存率の高いものが含まれ、顕著なローリングが認められない。上流側の近いところに奈良時代の遺跡が存在すると考えられる。



写真2 SD01 遺物出土状況（北から）

## 2. 遺 物

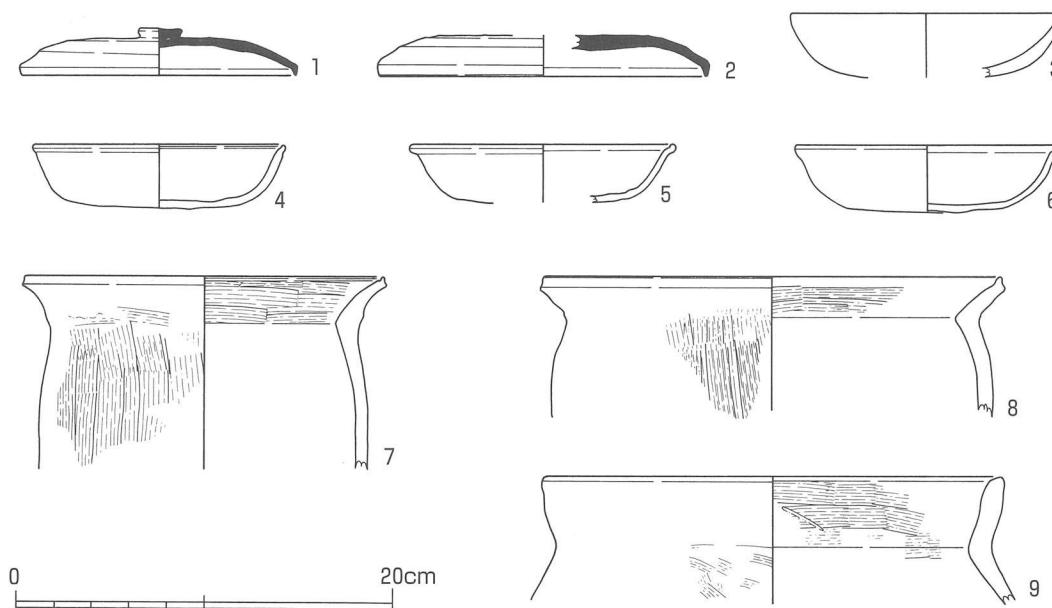
### SD01出土遺物（第7図1~9）

須恵器杯B蓋と土師器杯A、甕が出土している。

須恵器杯B蓋（1・2）は、平坦な頂部に扁平なつまみが付き、頂部と平坦部の境はやや屈曲している。頂部外面は回転ヘラケズリし、内面は不定方向のナデを施す。

土師器杯A（3~6）は、いずれも口径14cm前後、高さ3~3.5cmでほぼ法量が等しい。3は底部が丸みをもち、口縁端部をそのまま丸く納める。4~6は底部の平坦化がみられるものの、口縁部との境は不明瞭である。口縁端部は内側に沈線を巡らせ、巻き込んだ様に見せている。調整は残りが悪く不明であるが、底部はいずれもヘラケズリを行わず、無調整である。

土師器甕（7~9）では、7と8は長胴の体部から鋭く屈曲して口縁部が開き、端部を上につまみ上げる。9は口縁部がやや直立気味に立ち上がる。3点とも口縁部内面のヨコハケが良く残り、体部外面にもハケを施す。



第7図 SD01出土遺物

## 第4節 中世の遺構と遺物

### 1. 遺構

中世の遺構には、調査区の中央を走る自然流路（S D O 2）、西微高地で発見された土坑（S K 0 1～0 3）と溝（S D O 3）、東微高地で発見された柱穴と溝（S D O 4・0 5）がある。

#### S D O 2

調査区のほぼ中央を北から南に流れていた流路である。最下層あるいは西肩部からは東微高地の柱穴や遺物包含層から出土したものと同時期の遺物が包含されている（24～37）ため、両者の同時性が知れる。流路の大半は、第2次大戦後に築かれた間知石積みの水路によって破壊されているが、このことから、現代に至るまで水路として稼働していたことがうかがえる。

#### 西微高地の遺構

##### S K O 1（第8図）

西微高地の北西付近にあり、同様な規模のS K O 2と並ぶ。径85～90cm、深さ20cmのやや歪な円形土坑である。底面は平坦で埋土は3層に分かれる。わずかながら中世の遺物が出土している。

##### S K O 2（第8図）

調査時のトレーニチによって南半が失われているが、径90cm前後、深さ約25cmの円形土坑に復元される。底面はやや凹凸があり、埋土は2層に分かれる。わずかながら中世の遺物が出土している（10）。

##### S K O 3（第8図）

調査区の中央、西微高地の東縁にある南北5m、東西1.6m、深さ約60cmの土坑である。断面を見ると、S D O 2の埋土とした3層が、溝の中央に向かって砂礫層に漸変しているのに対し、褐灰色のシルト質砂～砂礫層である2層は、途中で立ち上がりをもっている。平面的な形状と土層の堆積状況からS D O 2とは独立した遺構と判断した。しかし、調査区の北壁付近あるいはS K O 3の南側でも、S D O 2の西肩付近には遺物を含む褐灰色土の分布する傾向があり、S D O 2の堆積の一部と考えたほうが妥当かもしれない。

遺物は、13世紀代を中心とする土器が比較的まとまって出土している（11～13）。

##### S D O 3（第8図）

西微高地の東縁から少し内側を、S D O 7に沿って直線的に走向する溝である。北端は攪乱に当たり、その先へは延びておらず、南端はS K O 3によって切られている。幅約75cm、深さ約25cmの小規模な溝である。埋土からはわずかながら中世の土器が出土している（14～17）。

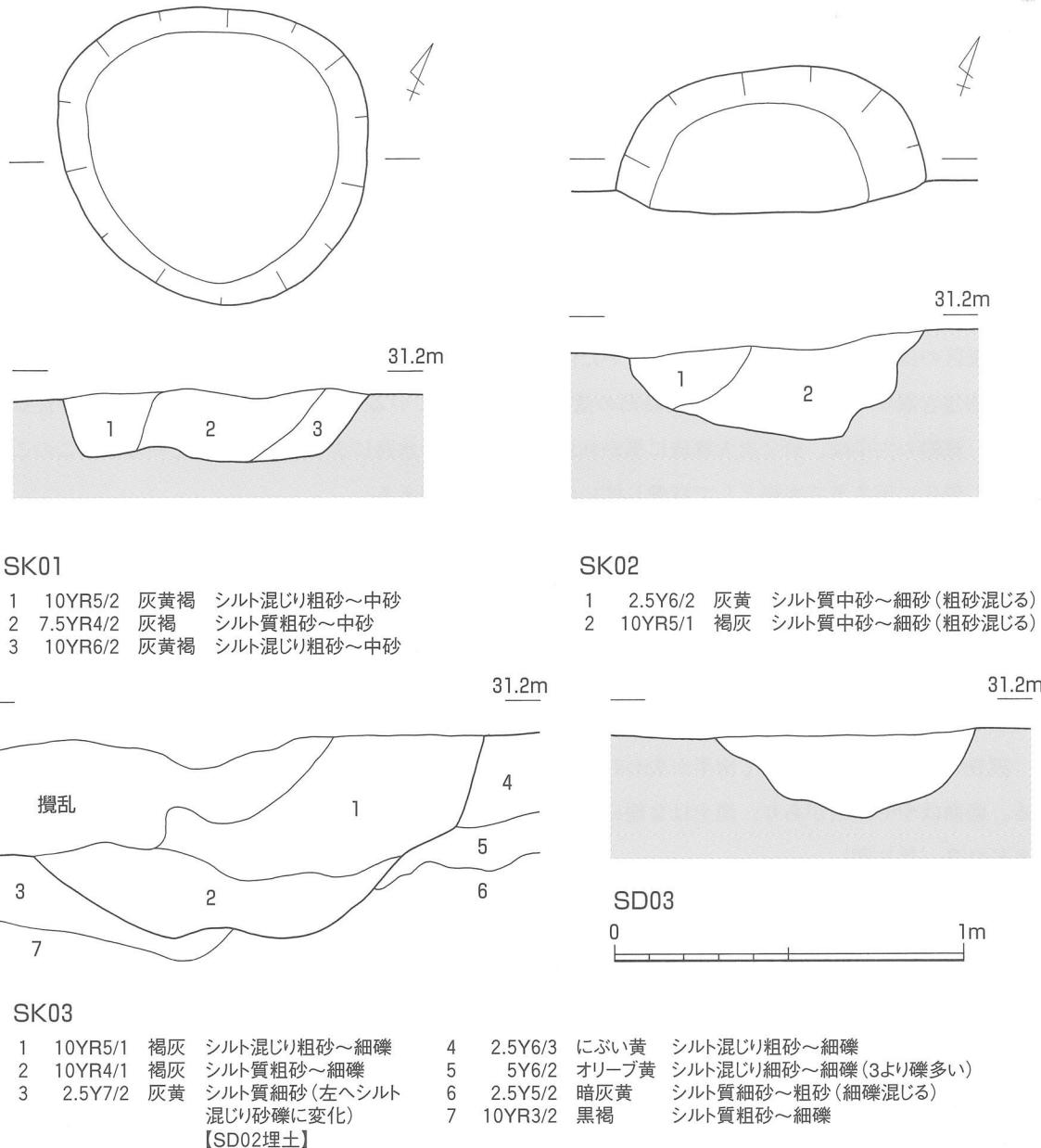
#### 東微高地の遺構

##### 柱穴

東微高地上に10数基が散在する。柱穴の径は20～25cm、深さは20～30cmほどであるが、最も深いものは40cmを越える。埋土内からは中世土器の小片がわずかに出土したのみである。調査範囲が狭いため、掘立柱建物を復元するまでには至っていないが、周辺地形から推察して、調査区の北東隅からその北側に掘立柱建物群が展開していることは十分に考えられる。

##### S D O 4（第11図）

東微高地の南辺際を走る東西方向の溝である。南肩は削平されているが、本来は微高地の周縁に巡らされていたものと考えられる。幅約80cm、深さ約15cmあり、埋土は灰褐色のシルト混じり粗砂～中砂



第8図 SK01～03、SD03

である。東端は調査区外へ続き、西端は間知石積みの水路によって破壊されている。埋土内から13世紀代の須恵器や土師器とともに、青白磁の合子などが出土した(18～23)。

#### S D 0 5 (第11図)

東微高地の南辺から少し下がった高さのところを、SD04と併行して東西方向に走向する溝である。幅約50cm、深さ約20cmを測り、埋土はにぶい黄色の細砂～細礫である。

## 2. 遺 物

溝や土坑などから出土した遺物は、小片が中心で量も多くはないが、時期が判るものは12世紀後半～13世紀代に収まる。

#### S K 0 2 出土遺物 (第9図10)

土師器皿（10）が出土している。手捏ね成形の浅い皿で、いわゆる「て」字状口縁をもつ。

#### S K O 3 出土遺物（第9図 11～13）

須恵器椀、鉢、土師器羽釜が出土している。

須恵器椀（11）は、やや不明瞭ながら見込みに窪みが残り、糸切り底の底部円盤の上に粘土紐を積み上げたものと思われる。体部は内彎して立ち上がる。

須恵器鉢（12）は、体部内面と口縁端面がほぼ直角で、端部はやや肥厚している。11と12は、12世紀前半の東播産の製品である。

土師器羽釜（13）は、口縁部の立ち上がりが短く内傾し、鍔部の張り出しが短く水平気味に延びる。体部内面の調整はイタナデで、口縁部外面はハケを施すが、ユビオサエの跡も残る。胎土には粗い砂粒を多く含む。

#### S D O 3 出土遺物（第9図 14～17）

土師器皿と須恵器椀が出土している。

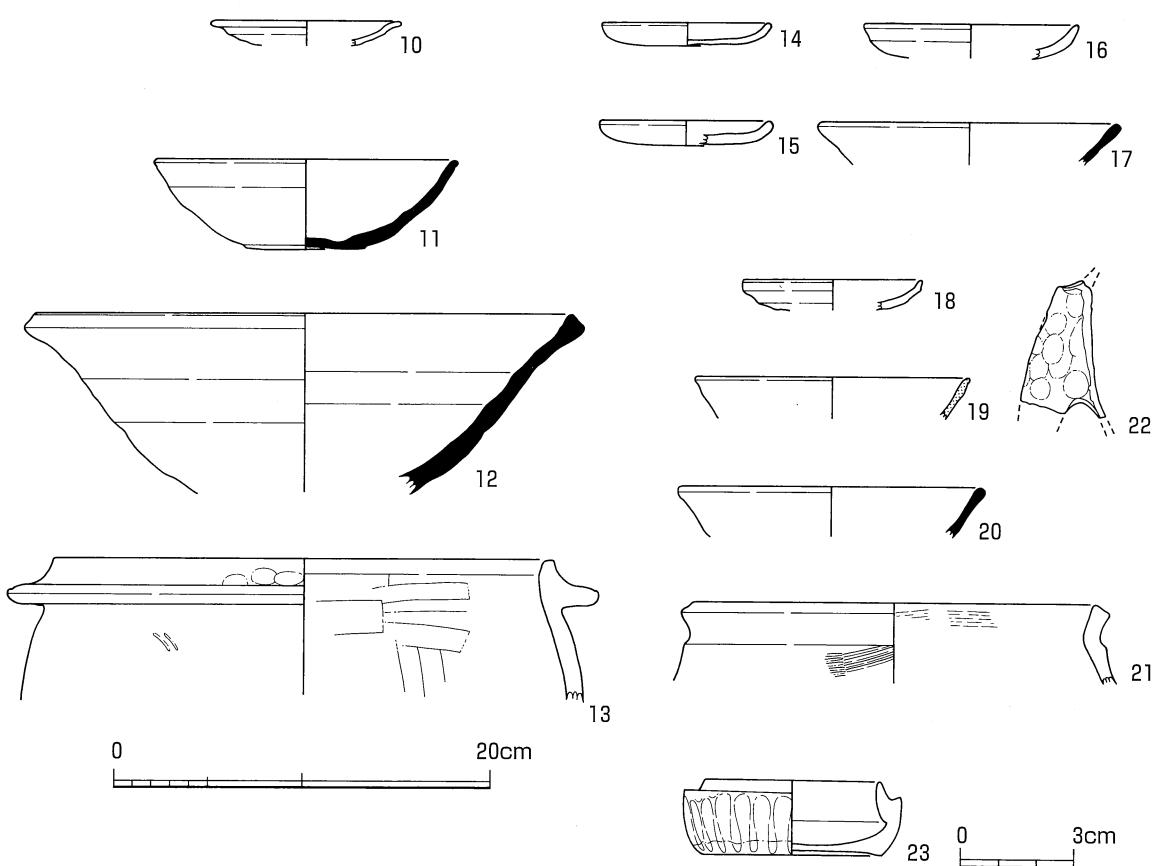
土師器皿（14～16）は、手捏ね成形で、口径9cm弱のもの（14・15）と11cmほどのもの（16）がある。

須恵器椀の口縁部片（17）は、小片のため傾きや径は不正確である。

#### S D O 4 出土遺物（第9図 18～23）

土師器皿、瓦器椀、須恵器椀、土師器鍋、瓦質鍋、青白磁合子の身が出土している。

土師器皿（18）は、手捏ね成形で口径9cm強のものである。



第9図 S K O 2 · 0 3 、 S D O 3 · 0 4 出土遺物

瓦器椀（19）と須恵器椀（20）は口縁部の小片である。

土師器鍋（21）は、口縁部付近の小片で、体部外面はタタキ、口縁部内面はハケで調整する。

瓦質足鍋の脚部（22）はユビオサエで成形している。

青白磁合子の身（23）は、側面には30弁の花弁を刻む。底部はわずかに内反りし、体部は少し外に開いて立ち上がる。釉薬は側面上部と内面の全面にかけられており、側面は下方まで釉薬が及んでいる。13世紀中頃～後半の華南産の製品で、あまり質の良いものではない。

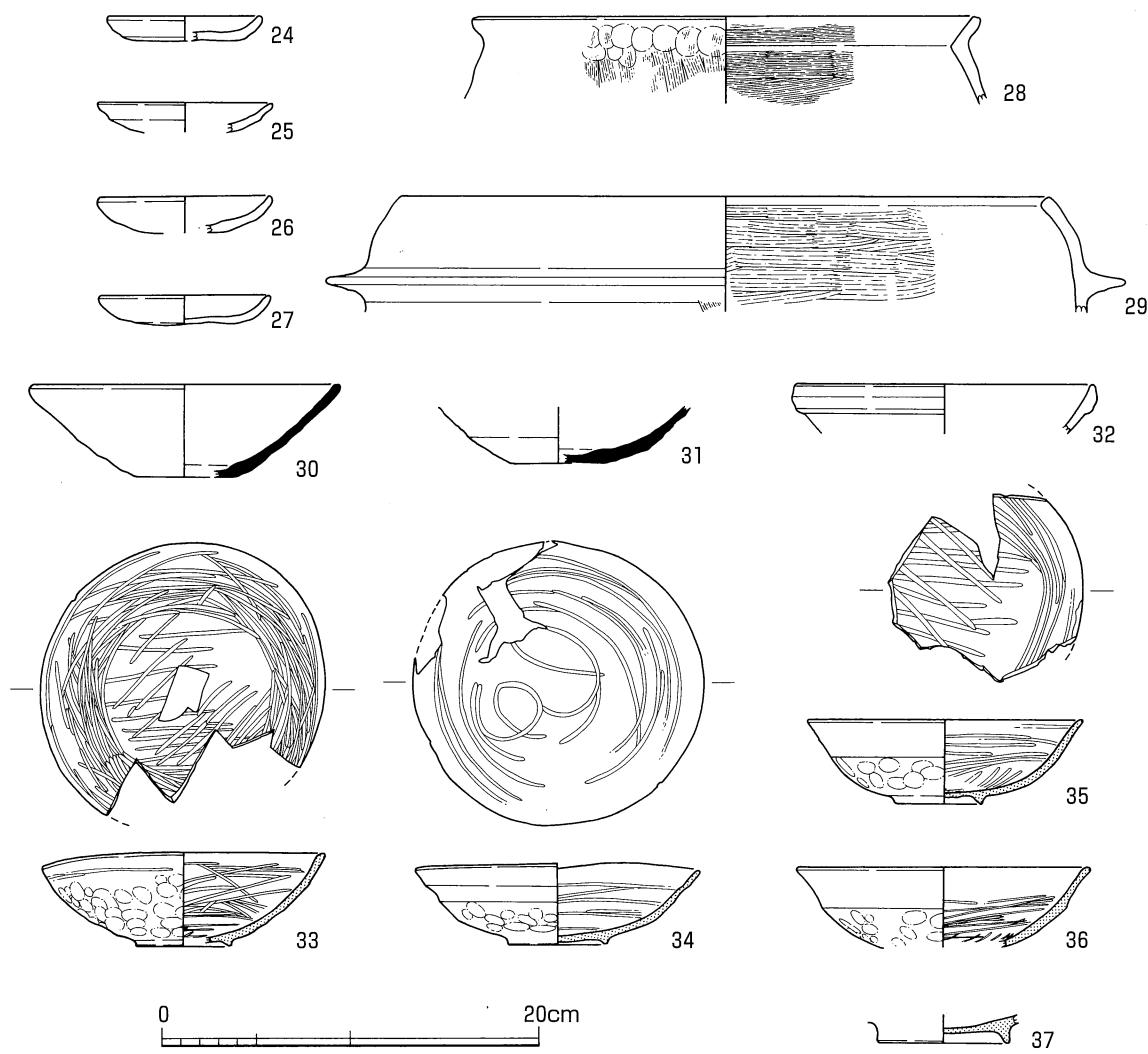
#### S D O 2出土遺物（第10図24～37）

西肩付近の砂礫層中から出土したものが大半で、土師器皿、羽釜、瓦質鍋、瓦器椀、須恵器椀、白磁碗、黒色土器椀がある。

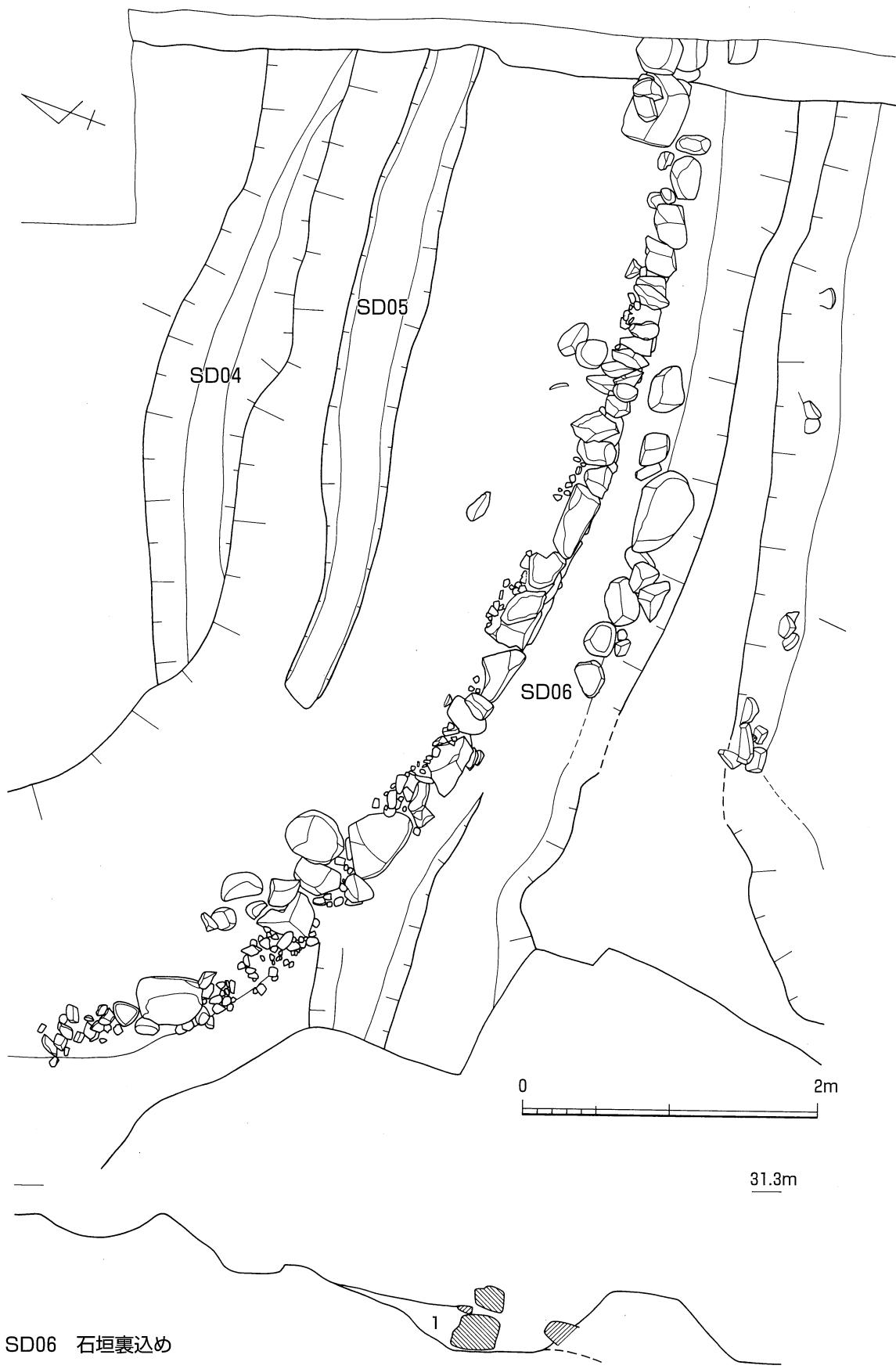
土師器皿（24～27）は、手捏ね成形で口径8～9cmのものである。24は底部にユビオサエの跡が残るが、他はナデで仕上げている。

土師器鍋（28）は、鋭く外反する短い口縁部をもつ。

土師器羽釜（29）は、口縁部が高く、彎曲気味に内傾する。内面はハケで仕上げる。鉄製羽釜を写した形態で、13世紀代のものと思われる。



第10図 S D O 2出土遺物



第11図 SD04~06

須恵器碗（30・31）は、見込みに若干の窪みが残る。30の体部は斜め外方に伸びる。SKO3出土の11と同じく、12世紀前半に位置づけられる。

瓦器碗（33～37）は、器高が低く高台の断面形が低い三角形状のもの（33～35）と、高台が長めで外開きとなるもの（37）がある。33は34～36よりも器高が少し高く、高台の形態も台形の趣を残す。外面は口縁部近くまで指頭圧痕が及び、内面のヘラミガキは隙間が目立つ。見込みには斜格子の暗文を施す。34・35は口縁部外面から体部の中程までをヨコナデし、下半は指頭圧痕が残る。内面のヘラミガキは疎らで、見込みには連結輪状（34）や斜格子（35）の暗文を施す。これらの瓦器碗のうち、34～36は高台が退化し器高も低平化しており、13世紀中頃以降に位置づけられよう。33はこれらより少し古く、12世紀後半と考えられる。

白磁碗（32）は、玉縁状に肥厚した口縁部の小片で、内外面とも灰白色の釉薬がかけられている。横田・森田分類による白磁碗IV類に相当する。

## 第5節 近世以降の遺構と遺物

### 1. 遺構

東微高地南側の一段低くなったところからは、石垣を伴う溝（SD06）、畠状遺構、井戸（SE01）が発見された。これらは、18世紀後半頃から周辺の市街地化が進む明治中頃までの状況を示すものである。また、調査区の南西隅では明治期と考えられる伏せ鉢遺構が発見された。

#### SD06（第11図）

東微高地の裾に沿って弧を描いて石垣が築かれ、その南側に築かれた土手状の高まりと対をなして、幅70cm、深さ40cmほどの溝となる。東端は調査区外に延び、西端はSD02に取り付いて取水していたものと思われるが、間知石積みの水路を構築する際に破壊されている。溝の埋土は灰黄色の中細砂質シルトである。

石垣は一抱えくらいある大きな石から、小さなものでは拳大の自然石を用い、二～三段程度に構築されている。石の積み方は乱雑ではあるが、大きな石を1段目に置き、上に乗せる石は小さめの石が用いられている。1段目の石では長辺を溝の内側に向けて配置するのに対して、2段目や3段目の石は小口を溝の内側に向けて積み上げる傾向が見て取れる。裏込めは、石のすぐ近くには小石を詰め、全体を砂



写真3 SD06石垣検出作業（南西から）

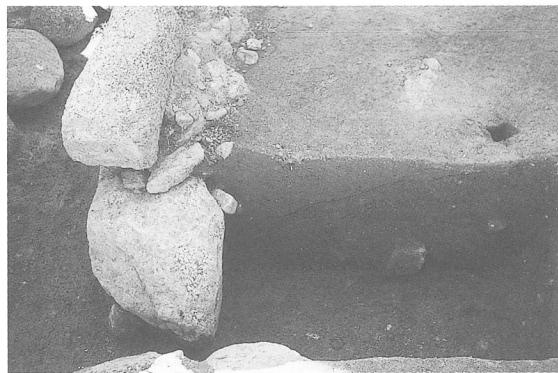


写真4 SD06石垣裏込め断面（東から）

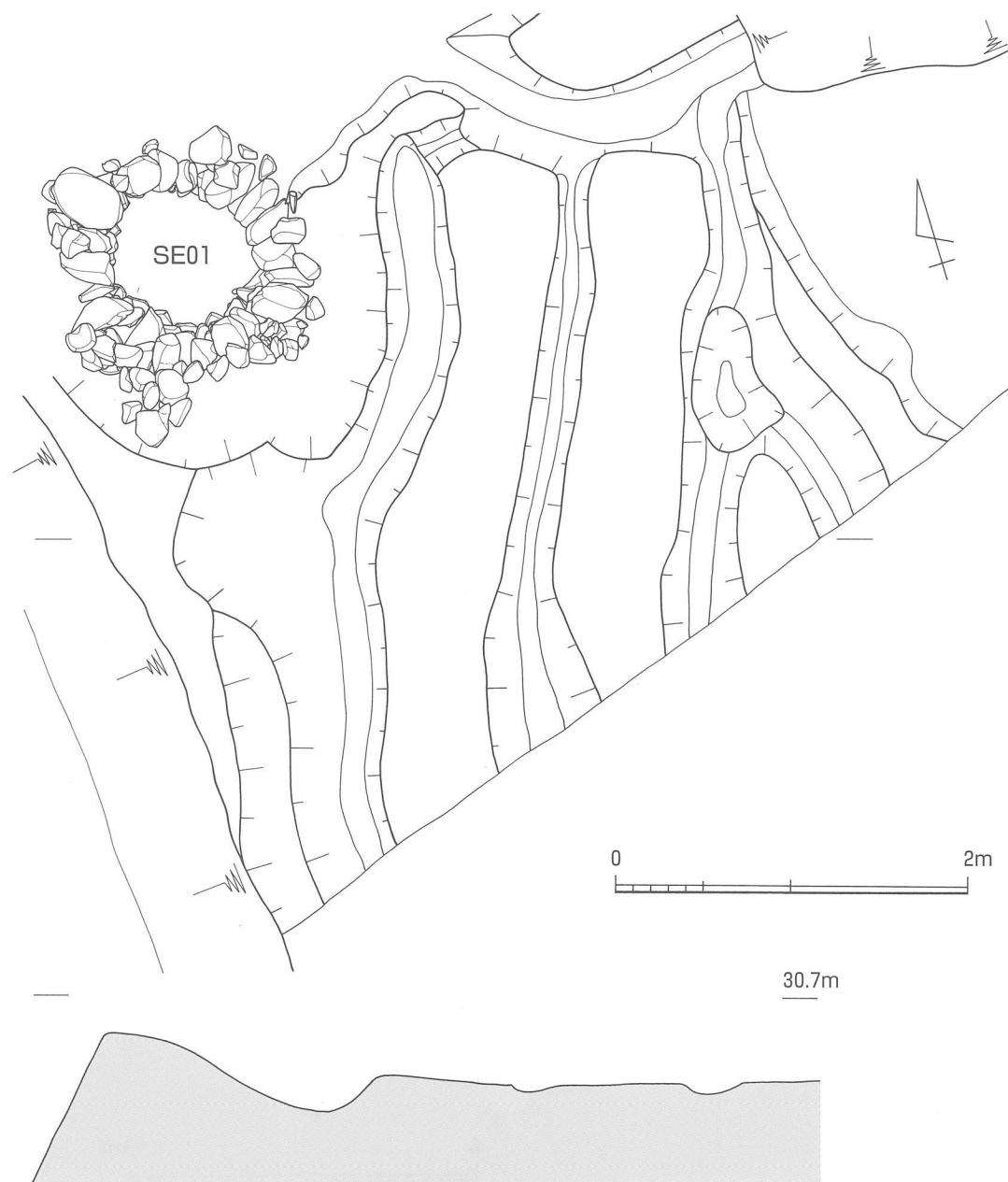
質シルトで埋めている。

石垣の向かい側に設けられた土手は、土を盛り上げて高さ約50cmの台形に構築されており、その裾部にも石が幾つか置かれたり埋め込まれたりしている。石垣のように並べたり積み上げたりした状況ではないものの、多少なりとも土手の保護を意図して配されたものであろう。

石垣の裏込めや溝内からは、中世の土器とともに18世紀後半の染付け磁器などが出土している(40・41)。

#### 畝状遺構(第12図)

石垣を伴う溝の南域に広がっており、その南西隅のごくわずかな範囲を調査したに過ぎない。表土が土壤化しているとともに、幅20cm、深さ5~10cmほどの溝に区切られることによって、幅50~70cm



第12図 SE01、畝状遺構

程度の畝状の高まりが3列形成されている。その東側は幅の狭い高まりが一つあるものの、畝状の高まりは形成されていない。遺物は出土していないが、土層の堆積状況から石垣よりも一時期新しい遺構であると考えられる。

#### SE01 (第13図)

畝状遺構の北西隅に構築された石積みの円形井戸である。人頭大より少し大きめの自然石を長径約90cm、短径約70cmの楕円形に積み上げている。石積みの上辺は、後世の攪乱によりかなり崩壊した状況にあるが、最上段の石では、細長い石を放射状に配している状況が見て取れる。

畝状遺構を覆う土層と同一の土層によって覆われていることと、畝状遺構との位置関係から、畝状遺構と同時に使用されていた井戸であると考えられる。したがって、農業用の野井戸であろう。

井戸内の掘削は、約60cm掘り下げた段階で湧水し、危険を伴うそれ以下の掘削は中止した。したがつ



第13図 SE01

て、出土遺物はわずかであるが、掘り方などから18世紀後半の染付け磁器や瓦が出土している(38・39)。

#### 伏せ鉢遺構(第14図)

調査区の南西隅に存在する。底部を穿孔した高さ約15cmの鉢(43)を逆さまに置いた遺構である。側溝を掘削する際に、V k層中から発見しており、掘り方は確認できなかった。逆さまに設置された鉢の底部はV k層上面よりわずかに低い高さにあり、遺構の底には掘り方の底と思われる浅い窪みも認められたことから、本来は旧耕土層であるⅢ a層上面あたりから掘り込まれたものと思われる。

鉢の内側には拳大より少し大きい程度の自然石が数段に積み上げられ、鉢と石の間からは素焼きの土器の破片(42)が飛び出していた。石は鉢の外側にもあるが、元は内に積まれていたものが滑り出たのであろう。

鉢には小さな足が三つ付いており、底部には焼成後の穿孔がある。出土時にはこの孔を中心に三つに割れており、その際に生じたと考えられる破片が内側から見つかっている。の中には穿孔部分の破片は含まれておらず、あらかじめ穿孔されていたことが分かる。

底部を穿孔した陶器を逆さまにして地中に埋めた遺構としては、まず、水琴窟が思い浮かぶ。水琴窟は、伊丹郷町遺跡や明石城武家屋敷跡などで報告されており、近世の屋敷地内に設けられた風雅な造作である。伊丹郷町遺跡や明石城武家屋敷跡では、高さ60~70cm程の陶器製甕を用いる例が多く、手水を利用して音響を楽しむことから、敷地内に設けられるのが通例である。

これに対して、伏せ鉢遺構は鉢の高さが20cmに足らず、屋敷内のような場所に設けられているわけではない。したがって、これを水琴窟である断定するのは躊躇される。

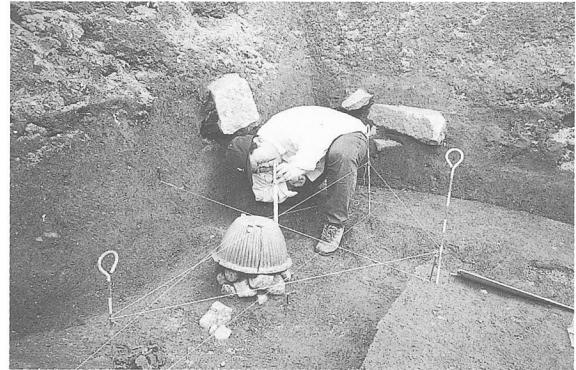
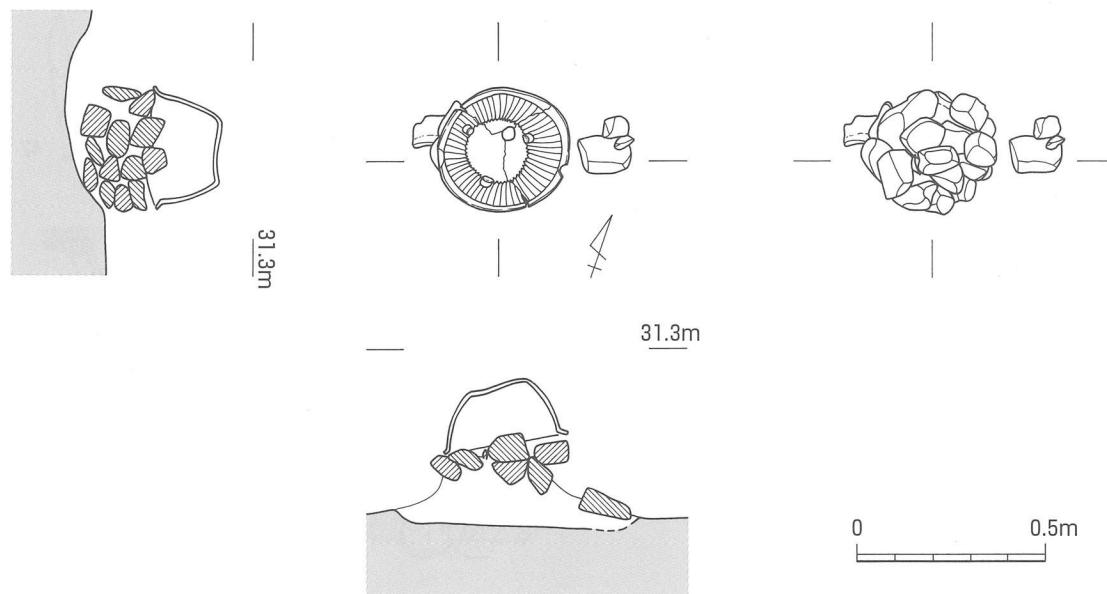


写真5 伏せ鉢遺構調査状況



第14図 伏せ鉢遺構

## 2. 遺 物

### S E O 1 出土遺物（第 15 図 38・39）

磁器碗と瓦が出土している。

磁器碗（38）は、染付け碗の底部で、内外面とも一条の界線が描かれる。高台の内側は露胎し、中央が削り残されて小さく盛り上がる。18世紀後半の肥前系波佐見産の粗製品である。

瓦（39）は、厚さ 1.5 cm の平瓦で、黄土色の煉瓦風に焼成されている。

### S D O 6 出土遺物（第 15 図 40・41）

石垣の裏込め土から磁器碗と陶器甕が出土している。

磁器碗（40）は、外面にこんなにやく印判で施文される。18世紀前半を上限とする肥前系波佐見産の粗製品である。

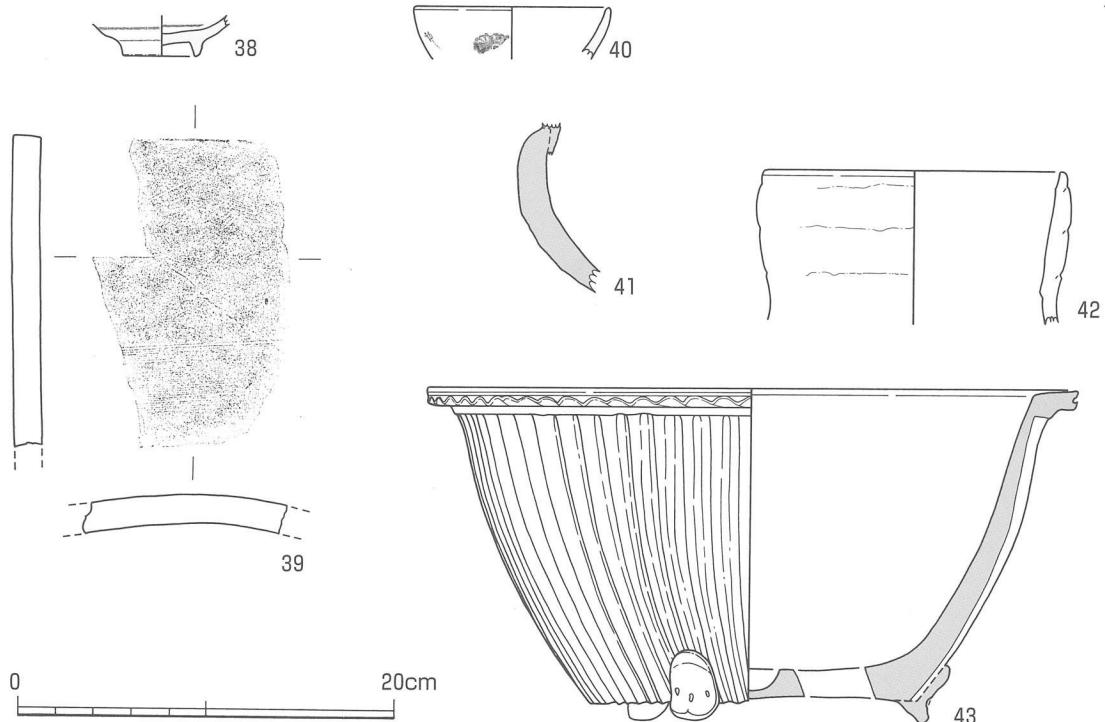
陶器甕（41）は、口縁部を折り返して密着させている。15世紀前半の常滑の製品と考えられる。

### 伏せ鉢遺構出土遺物（第 15 図 42・43）

陶器鉢と蛸壺と思われる土師器が出土している。

土師器壺（42）は、円筒形の口縁部破片で、粘土紐の積み上げ痕が明瞭に残る。筒状を呈することから蛸壺の可能性がある。

陶器鉢（43）は、型抜き技法で製作された小型の水鉢である。外面に襞状の筋をつくり、水平に開く口縁部の端面中央を深い沈線で上下に分け、下半は連続して押し窪める。底部には小孔を穿った橢円形の粘土板を 3 枚貼り付け短い脚とし、内面には小判形の窪みがある。内外面とも赤土部を塗布しており、幕末～明治期の丹波産陶器の可能性がある。



第 15 図 S E O 1、S D O 6、伏せ鉢遺構出土遺物

## 第6節 包含層出土の遺物

包含層からは、中世を中心に古墳時代や奈良時代の土器の他、石器や金属器が出土している。遺物量は少なく、図化できるものはわずかである。

### 土器・土製品

土師器皿には、底部を回転糸切りしたもの（44）と手捏ねで「て」字状口縁をもつもの（45）がある。前者は12世紀後半、後者は12世紀代の時期が考えられる。

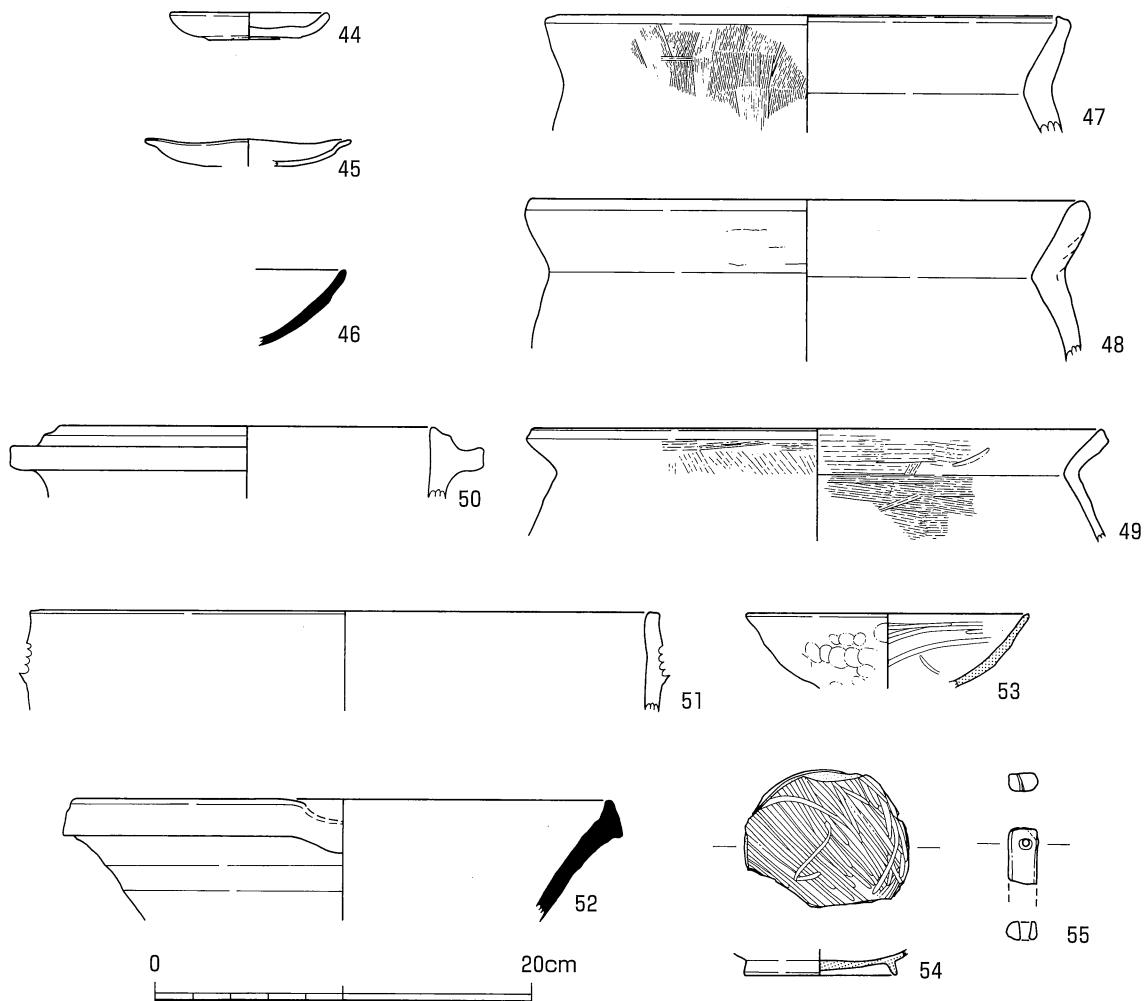
須恵器椀（46）は口縁部～体部にかけての破片である。

土師器甕（47～49）は、口縁部が「く」字状に屈曲する。47の外面と49の内外面はハケで調整される。

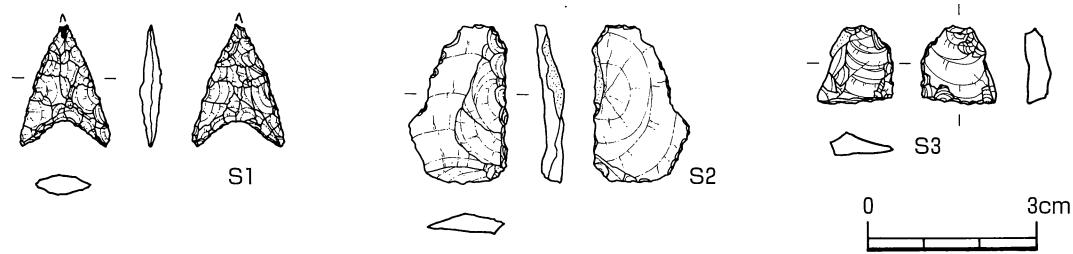
土師器羽釜（50・51）は、大小がある。50は径20cm弱で、口縁部の直下に断面方形で厚手の鍔が巡る。砲弾形の体部を呈した摂津～播磨地域に分布する形態であろう。51は口径が30cmを越え、体部から口縁部にかけて直立する。鍔は削り取られたように摩滅している。胎土に粗い砂粒を多く含む。

須恵器鉢（52）は、口縁部が上下に拡張するもので、14世紀前半に位置づけられる。

瓦器椀（53）は、器高が低く、内面のヘラミガキも疎らなものである。外面には指頭圧痕が残る。



第16図 包含層出土の土器・土製品



第17図 包含層出土の石器1

黒色土器椀（54）は、内面が黒色を呈するA類の底部で、脚部は長く外開きとなる。内面にはヘラミガキが密に施されている。

土錘（55）は、円筒状で両端に孔を穿つタイプのもので、端面には孔と平行に溝が切られている。

### 石 器

石鎌（S 1）は良質のサヌカイト製石鎌で、全面調整で整った形態に仕上げられている。縦断面での対称性も良い。小型で基部の抉りも深いことから、縄文時代に属しよう。

サヌカイト製の剥片（S 2）は自然面打面を残した横長剥片である。S 1 と同様に良質のサヌカイトである。

チャート製の小型剥片（S 3）は、中世以降の遺跡で出土する火打ち石片とは異なり、打面周辺の潰れは見られない。

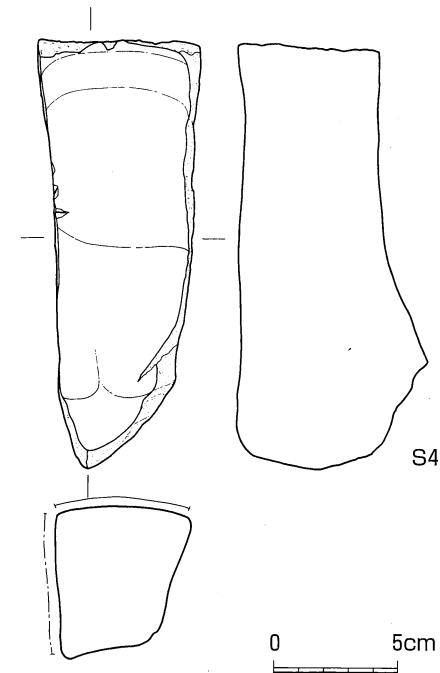
砥石（S 4）は凝灰岩質と思われる自然石を用いている。砂粒を若干含み、砥石としては荒砥であろう。砥面は上面だけが多用され平坦化されているが、側面も片側のみわずかに使用されているようである。

### 金属器

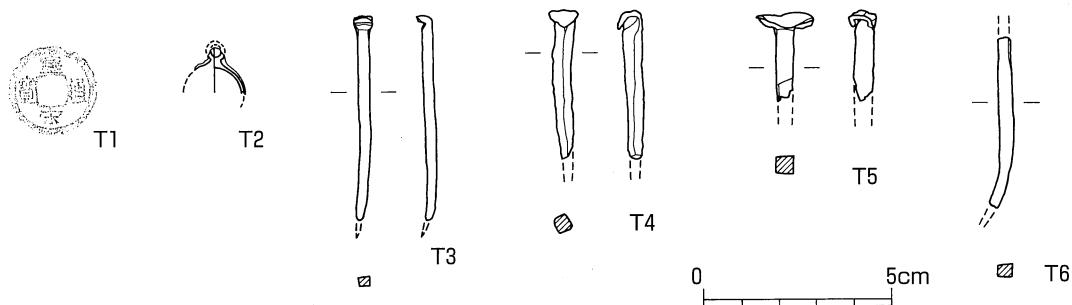
銅錢（T 1）は皇宋通寶（初鑄造年 1039 年）である。

銅製の鈴と推定されるもの（T 2）は、鋳と泥で形状を保っている状況であり、孔は肉眼では確認できない。X線透過フィルムの観察では、突起部に泥が詰まった小孔が認められたため、鈴と判断した。

鉄釘（T 3～T 6）は小型で、頭部の残る T 3～T 5 はいずれも巻き頭である。



第18図 包含層出土の石器2



第19図 包含層出土の金属器

## 第4章 結語

中山手西遺跡の発掘調査は、500 m<sup>2</sup>弱の小規模な調査であり、今回の調査で得られた知見は限られたものである。しかし、市街地の中で遺跡の範囲や存在そのものがわかりにくくなっている状況にあって、中山手西遺跡という新たな遺跡を見いだす事ができたのは幸いである。

今回の調査では、奈良時代と平安時代末～鎌倉時代および近世末～近代の遺構が発見されたが、いずれも遺跡の中心から離れ、周辺部にあたるため、遺跡の具体的な内容は明らかにしえなかつた。

周辺の発掘調査事例も数少なく、断片的な資料が得られているにすぎないが、ここでは、周辺遺跡の成果と合わせて、簡潔に発見された遺構を中心にまとめておきたい。

### 奈良時代

奈良時代の遺構は、自然流路と考えられる小さな溝状遺構が一条だけである。流路内から出土した土器を見ると、やや大きな破片が目に付き、遠く離れた場所から流されてきたものでは無いと考えられた。調査地の北側にある相楽園あたりに、この時代の遺跡の中心地を求めることが出来るであろう。須恵器杯B蓋の特徴から、8世紀半ば頃の年代が想定される。

周辺における奈良時代の遺跡の調査例としては、約300 m東南にある旧三宮駅構内遺跡<sup>(1)(2)</sup>を挙げることができる。古代山陽道と推定されている元町通商店街通りの北約150 mに位置しており、古代山陽道を見下ろす段丘の先端に立地している。掘立柱建物1棟や内部に木組み構造物をもつ土坑が発見されている。同じく古代山陽道の推定ルートのすぐ北側にある日暮遺跡でも奈良時代中頃と考えられる掘立柱建物3棟が発見されている<sup>(3)</sup>。これらの遺跡の東西には、「菟原郡」内の東灘区深江北町遺跡、住吉宮町遺跡、郡家遺跡、「八部郡」内の長田区御蔵遺跡、須磨区大田町遺跡のように「駅家」あるいは「郡衙」との関連が示されている遺跡が存在する。中山手西遺跡周辺は、ちょうど両者の中間にあたり、旧三宮駅構内遺跡で須恵器の稜椀が出土しているとはいえ、官衙的要素は希薄である。しかし、官道である古代山陽道の整備に伴い、その沿道には有力な集落も形成されたのである。

### 平安時代末～鎌倉時代

平安時代末～鎌倉時代の遺構としては、微高地上から柱穴と溝、土坑が発見されており、柱穴の点在する東微高地の背後に集落が展開していたと考えられる。明治14年に作成された都市地図を見ると、現在の相楽園の西半と、南北方向の通りを挟んだ東側には大きな池があり、その間の田畠が弧を描いて張り出していることがわかる（第20図A）。中世の集落はこの舌状の張り出した微高地上に広がっていたと推定される。

西微高地は、旧河道あるいは谷状の地形が埋没して形成されたことが判明した。調査地の西側約50 mのところに鎮座する四宮神社は比較的安定した地盤の上にあると考えられ、その間が谷状に低い地形となっていたと推察される。これが埋没する過程では、小規模な水田も開かれたことを土層観察から推定した。

溝を中心とした出土遺物のほとんどは12世紀後半～13世紀代に収まり、集落は鎌倉時代半ば頃には廃絶したと推定される。

この時代の遺跡は、中山手西遺跡よりも西方、湊川～妙法寺川流域で数多く発見されており、平家一門の伸長によって周辺が活性化したことがうかがえる。中山手西遺跡周辺では、二宮遺跡<sup>(4)</sup>で平安時代～鎌倉時代の掘立柱建物2棟が発見されている以外、現状では、集落遺跡の調査例は少なく、分布は希薄と言わざるを得ない。

#### 近世以降

18世紀後半以降、周辺には田畠が広がり、明治14年の地図に見えるような状況を呈していたと考えられる（第20図A）。発見された石垣を伴う溝や井戸、畠はその一端を垣間見せたものである。

その後、市街地化が進み、昭和12年には調査地の東側は小径で区切られ、すでに宅地となっている（第20図B）。その北側にある「小寺邸（現相楽園）」は、元神戸市長小寺兼吉氏の先代小寺泰次郎氏が明治18年頃築造に着手し、明治末期に完成した日本式庭園である。当時、一般からは「小寺邸」または「蘇鉄園」と呼ばれていたが、昭和16年3月神戸市へ譲渡されている。戦前には、園内に豪壮な本邸と付属建物があったが第二次大戦により焼失した。

調査区の東半部で確認された20～30cmの厚さをもつ焼土層は、まさに、この時の戦火を物語るものである。戦後間もなく、調査区の中央に間知石を積んだ煉瓦敷きの水路が構築されるが、北側には相楽園があり、水路はその壆に行き当たることになる。昭和23年に米軍が撮影した航空写真には、この水路らしきものが写っているが、やはり、相楽園の手前で止まっているようである（第20図C）。この水路がどのような目的をもったものか分からぬが、昭和28年にはすでに埋められ、敷地の区画としてその痕跡を留めるだけになったようである（第20図D▼印の位置）。

中山手西遺跡のある神戸市中央区一帯は、震災後多くの発掘調査が実施され、新たな遺跡の発見や遺



第20図 明治～戦後の中山手西遺跡周辺の変遷

跡の内容が判明しつつある長田区や灘区などに比べ、調査数も少なく、遺跡の半分は未だ断片的な資料が得られているに過ぎない。しかし、これはよりもなおさず、阪神・淡路大震災による被害が幾分か軽微であったことの裏返しと言って良く、幸いというべきであろう。

震災後10年を経て、街は一見、何もなかったかのように往時の賑わいを取り戻している。しかし、戦火が地中に埋もれたように、阪神・淡路大震災も地中にその爪痕を深く残しているのであろう。今も、多くの市民の心の中に残されているように。

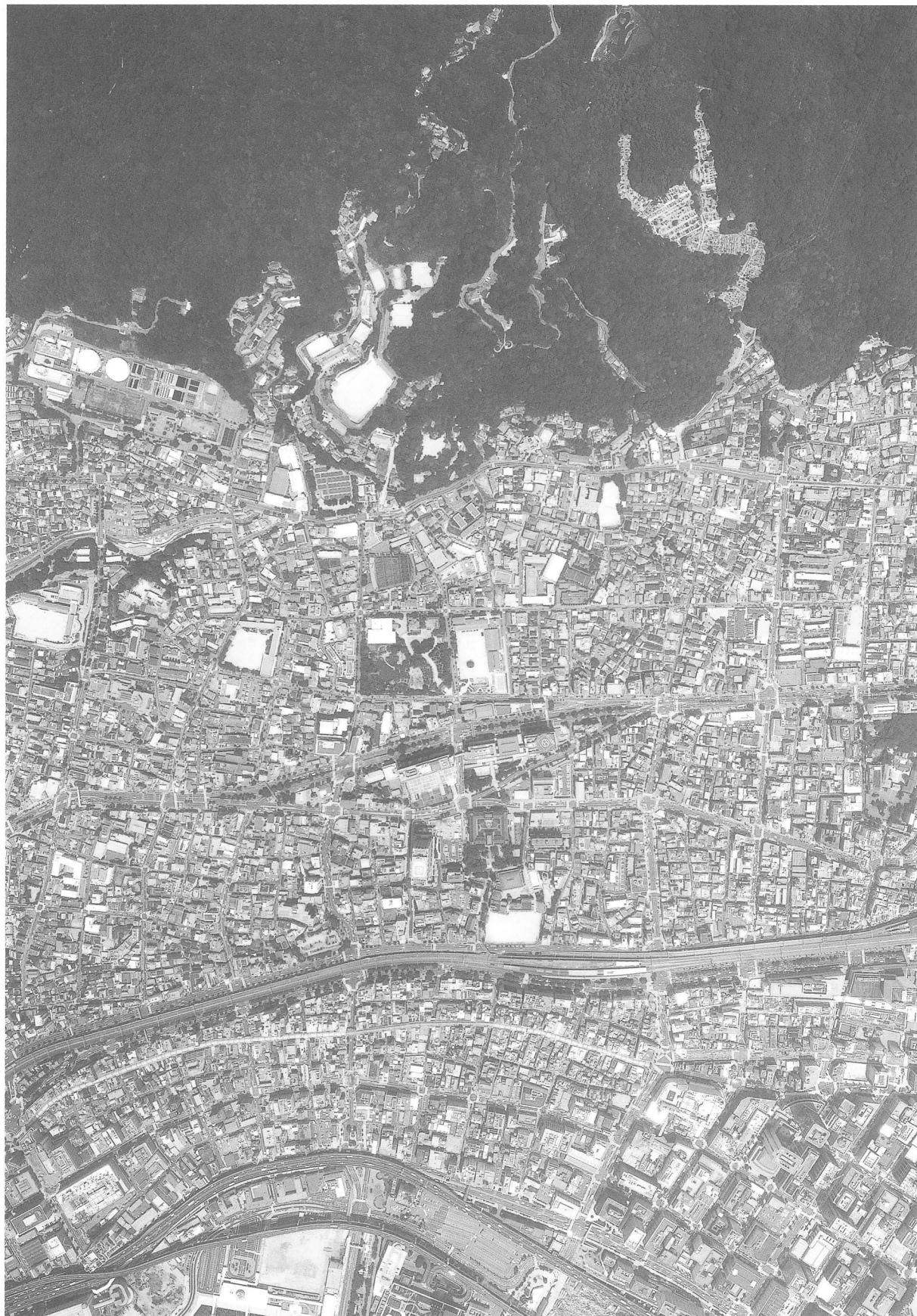
### 参考文献

- (1) 菅原宏明他 1993年 「旧三宮駅構内遺跡」『平成2年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会
- (2) 菅原宏明他 1994年 「旧三宮駅構内遺跡 第2次調査」『平成3年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会
- (3) 兼康保明他 1998年 「日暮遺跡 第11次調査」『平成7年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会
- (4) 谷 正俊 2001年 「二宮遺跡 第1次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会

# 報告書抄録

ふりがな	なかやまでにしいせき							
書名	中山手西遺跡							
副書名	災害対策棟整備事業に伴う発掘調査報告書							
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第276冊							
編著者名	藤田 淳							
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所							
所在地	〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号						TEL 078-531-7011	
発行年月日	西暦2005（平成17）年3月18日							
所収 遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号					
なかやまで 中山手 にしいせき 西遺跡	ひょうごけんこうべし 兵庫県神戸市 ちゅうおうくなかやまで 中央区中山手 どおり通 5丁目2-15	28110 970202 本発掘調査 980092	確認調査 41分 30秒	34度 10分 55秒	135度 10分 ~8月6日	確認調査 1997年6月7日 本発掘調査 1998年6月1日	確認調査 30m <sup>2</sup> 本発掘調査 475m <sup>2</sup>	災害対策 棟整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物		特記事項
中山手西遺跡	集落跡	奈良時代 鎌倉時代 江戸時代以降	流路 柱穴、土坑、溝、 水路、畝状遺構、 井戸、伏せ鉢遺構	須恵器・土師器 須恵器・土師器・瓦 器・青白磁合子の身 染付け・陶器・瓦				

\*緯度・経度は平成14年4月1日施行の測量法改正による世界測地系にもとづく値である。



遺跡周辺（上空から）

## 図版2



遺跡遠景（南から）



同（東から）



調査区全景（南から）



同（西から）

## 図版4



調査区全景（上空から）



北区 全景（西から）



北区 東微高地（南から）

## 図版6



南区 全景（北から）



南区 S E 0 1 と畝状遺構（北から）



北区 西壁（東から）



北区 西壁（南東から）



北区 東微高側の北壁（南から）



南区 西壁（北東から）



南区 南壁（間知石積み水路断面を北から）

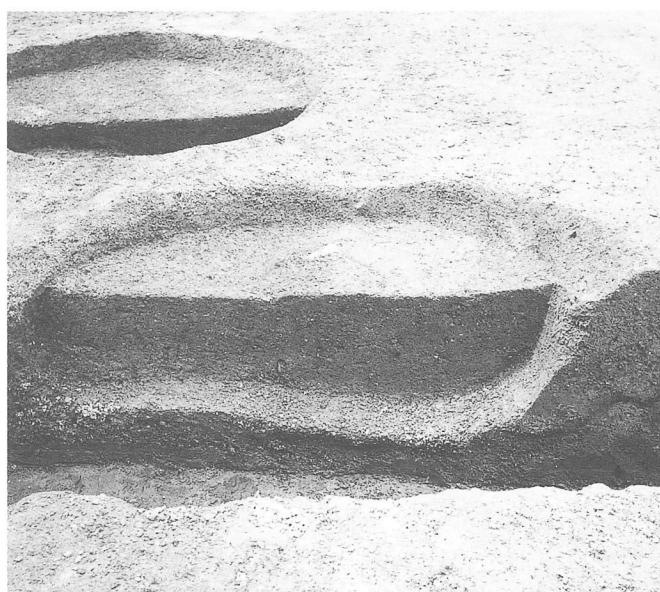
# 図版8



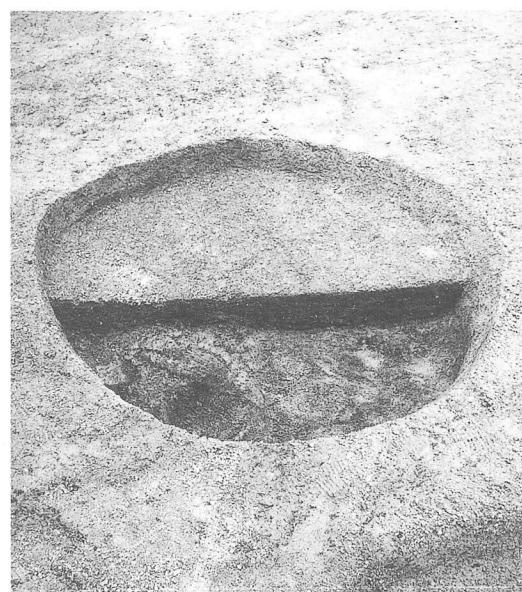
ピット断面



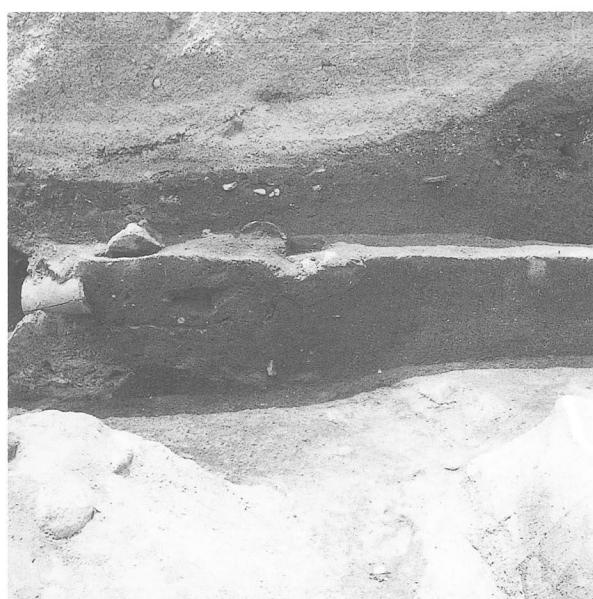
ピット断面



SKO 1断面 (南から)



SKO 2断面 (南から)



SKO 3断面 (北から)



SD 03断面 (南から)

北区 東微高地 (南から)



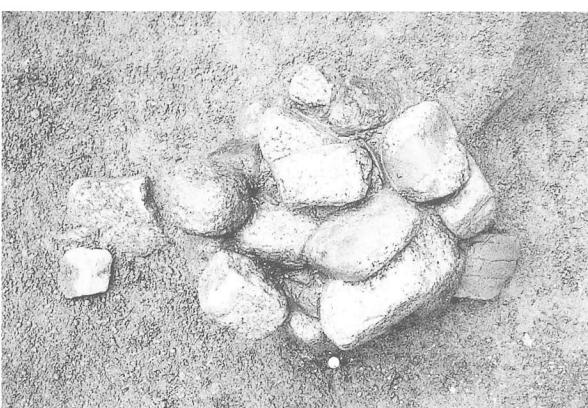
伏せ鉢遺構（北から）



同（北横から）



同（東から）



同下部（北から）

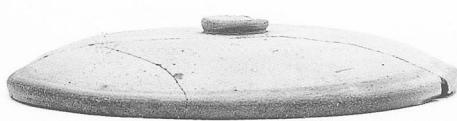
図版 10



S D O 6 (南西から)



同断面 (西から)



1



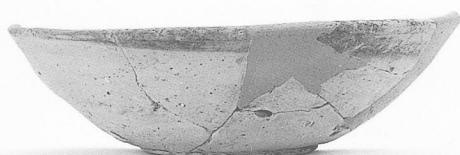
4



5



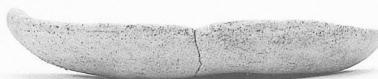
6



11



14



26



27



30



33



34



35

図版 12 出土土器 2



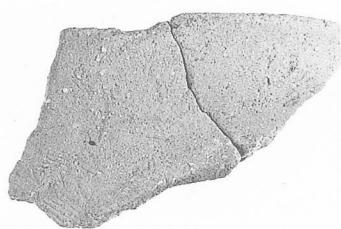
43



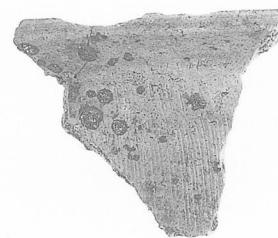
44



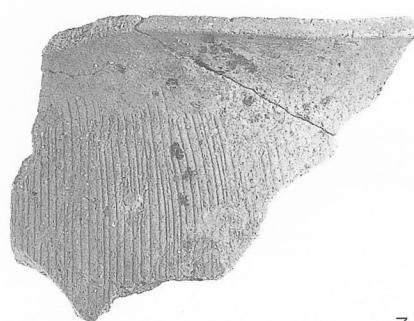
3



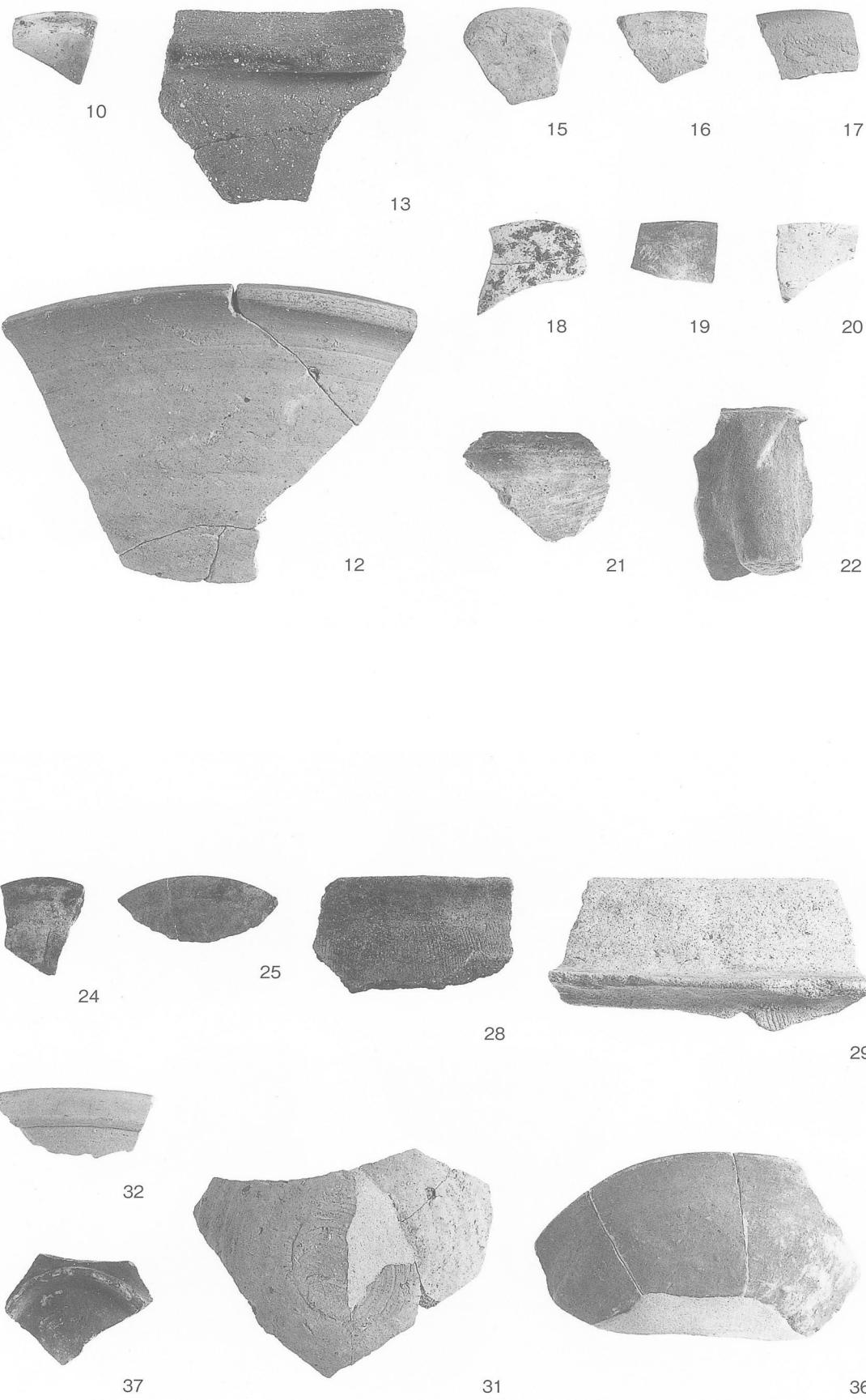
9



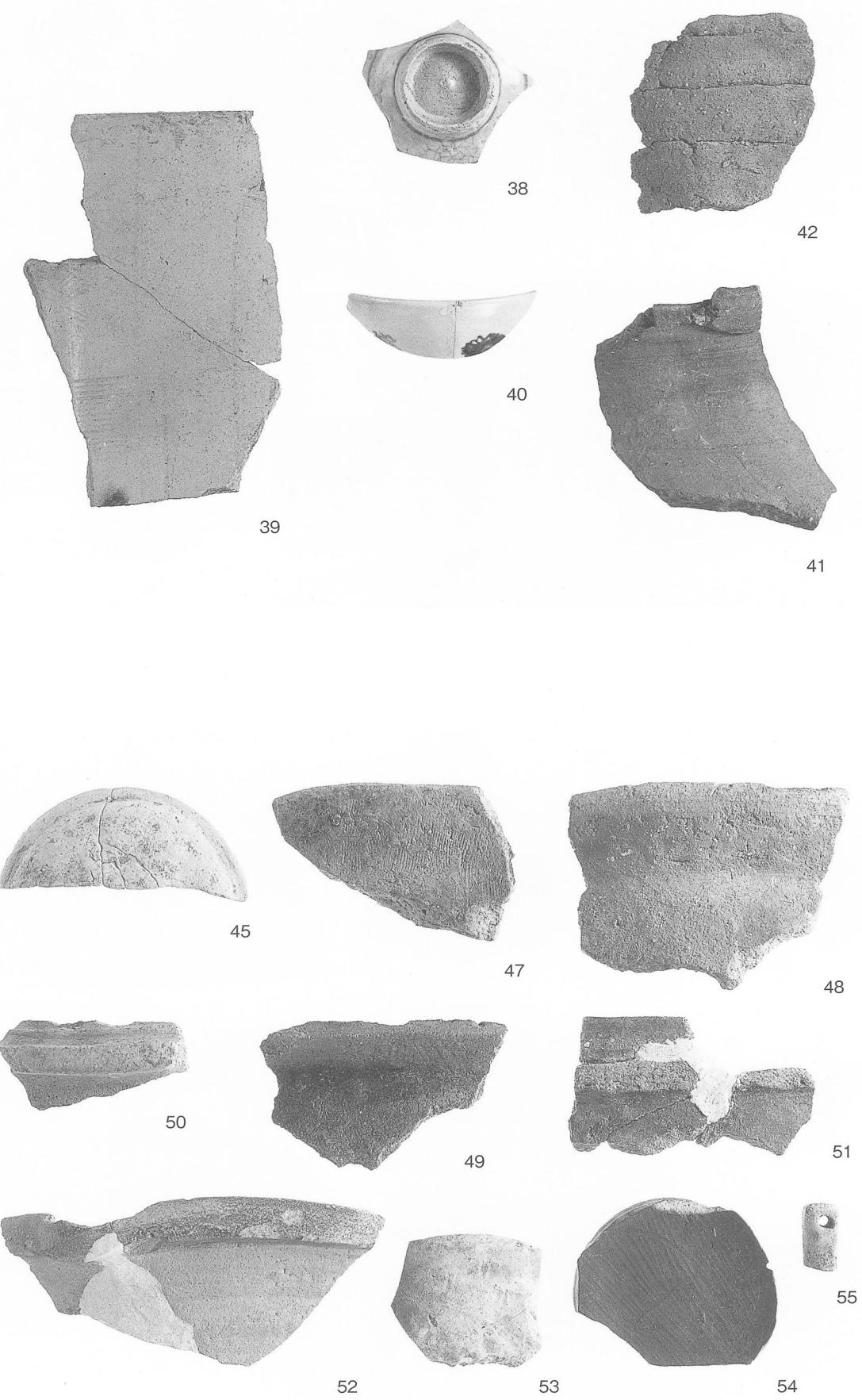
8



7



図版 14 出土土器 4



図版 15 出土金属器・石器



T1



T2



T3



T4



T5



T6



S4



S1



S2



S3

---

兵庫県文化財調査報告 第276冊

## 中山手西遺跡

— 災害対策棟整備事業に伴う発掘調査報告書 —

平成17年3月18日 発行

編 集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5

発 行 兵庫県教育委員会

〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10-1

印 刷 ウニスガ印刷株式会社

〒677-0053 兵庫県西脇市和布町39

---